
THE UFO RESEARCHER

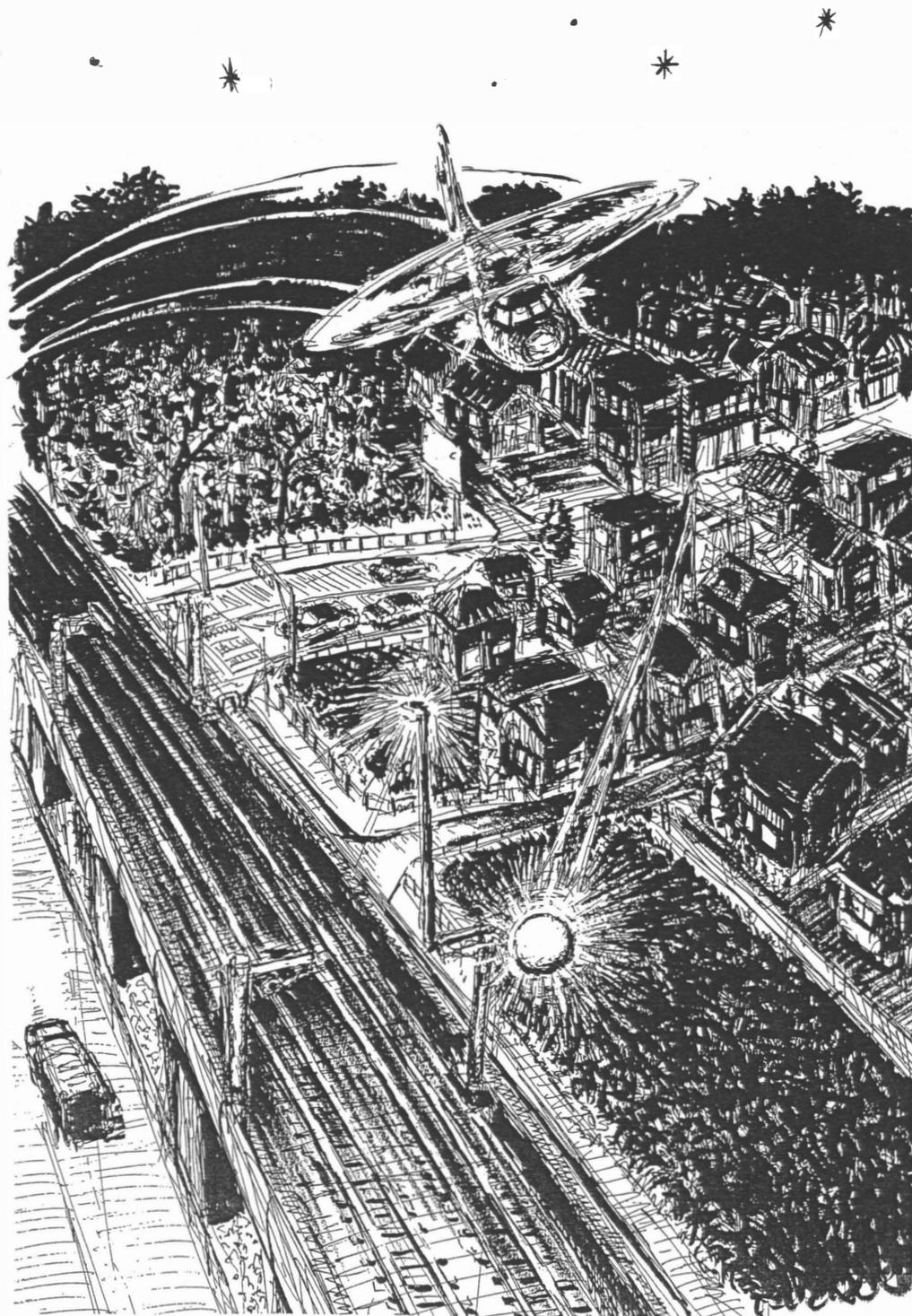
Sky People Association-west Japan

VOL.17 NO.1 2007

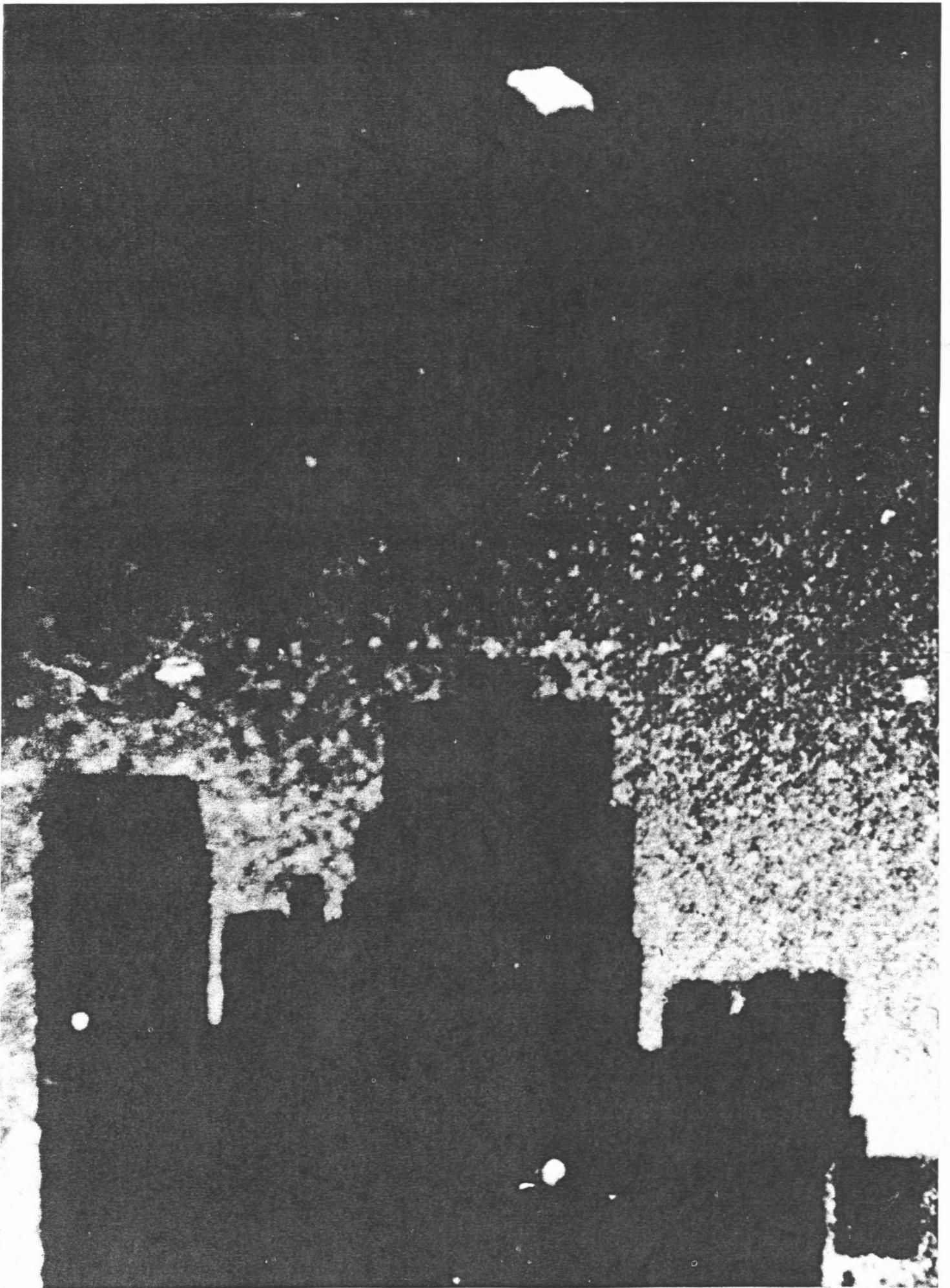
Kiyoshi Amamiya

193-5,Byodobo-cho, Tenri-city

Nara-pref. 632-0077 JAPAN



■ 2006年11月8日のUFO目撃に基づく想像図【目撃者佐々木氏による】本文に報告記載



1965年11月9日，美国和加拿大历史上最大的大停电发生。同时在地各地UFO目击连续发生。在曼哈顿高空LIFE杂志的摄影记者UFO摄影了。 —2—

THE UFO RESEARCHER

Magazine of SPACE & UFO FACTS

Editor: Kiyoshi Amamiya

Managing Editor: Yuki Amamiya

Associate Editor: Osamu Sato

Taira Fuzi

Fumi Kohara

Mari Saito

Illust. Associate: Shima Amamiya

Photographic Asst.: Tatsuya Inui

Circulation Dept. Masaya Komagamine

Research Staff: Hirokazu Fujihira

Teiji Sato

Shunya Moue

Takao Shimada

Kiyoshi Amamiya's

site Designer: Masahiro Tsuda

REPRESENTATIVES and CORRESPONDENTS
are all over the world.

Exchange Partners: SKY PEOPLE ASSOCIATION

Japan Space Phenomena Society

Kazuno UFO Research Association

The UFO Criticism by J.N. from Japan

Tugio Kinoshita(Director of UFO Contact House)

The organization of UFO Research Japan

Robert K. Lesniakiewicz (Poland)

SWIAT UFO(Poland)

NIEZNANY SWIAT(Poland)

CBUFOiZA(Poland)

BIBLIOTECA UFO ROMANIA INTERNATIONAL(Romania)

CALIN N. TURCU(Romania)

JUDr. Jiri KULT(Czech)

Milan Dolezal (Czech)

Takashi Okamura(U.S.A.)

Richard F. Haines Ph.D.(U.S.A.)

NARCAP(U.S.A.)

AFU(Sweden)

THE JOURNAL OF UFO RESEARCH(China)

UFOlogy Quarterly(Taiwan UFOlogy Society)

LIU FENG JUN(China)

Cheng Bainian(China)

Wu Jia Lu(China)

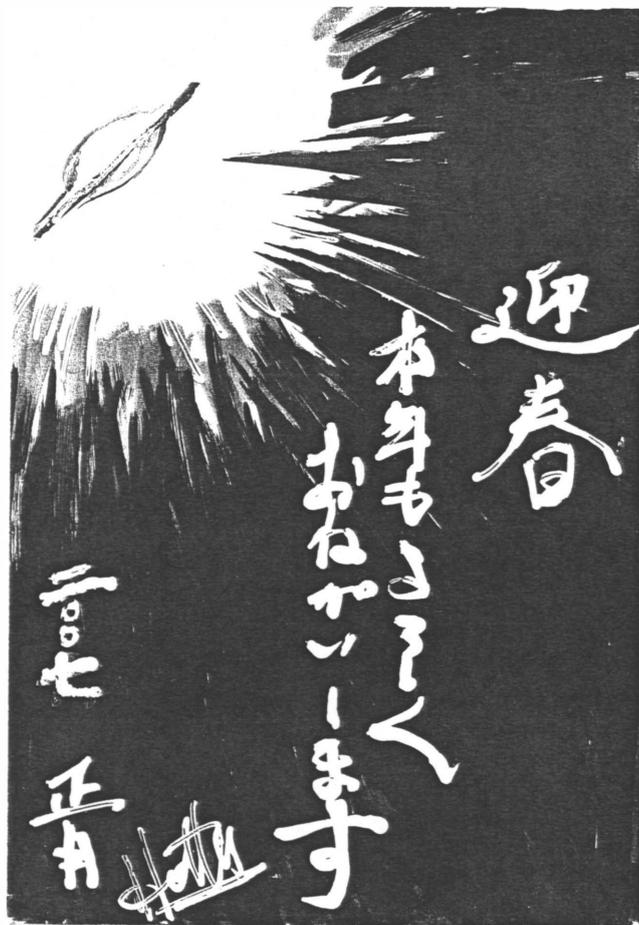
UFOlogy Research Institute of ShanXi(China)

Revista UFO(Brasil)

Francisco Fazio Baiz(Argentina)

Ahmad Jamaludin(Malaysia)

Jutta Eli (Israel)



祝

在和谐吉祥、辞旧迎新之际，
我在此再次感谢您对我们工作的支持！
并向您和您全家致以亲切的节日问候和
诚挚的祝福！祝元旦快乐！新春愉快！
阖家幸福！身体健康！万事如意！

上海市UFO探索研究中心

吴嘉禄

021-54101929

wjloo@online.sh.cn

www.ufo.sh.cn



Anna and Robert Lesniakiewicz with Argos

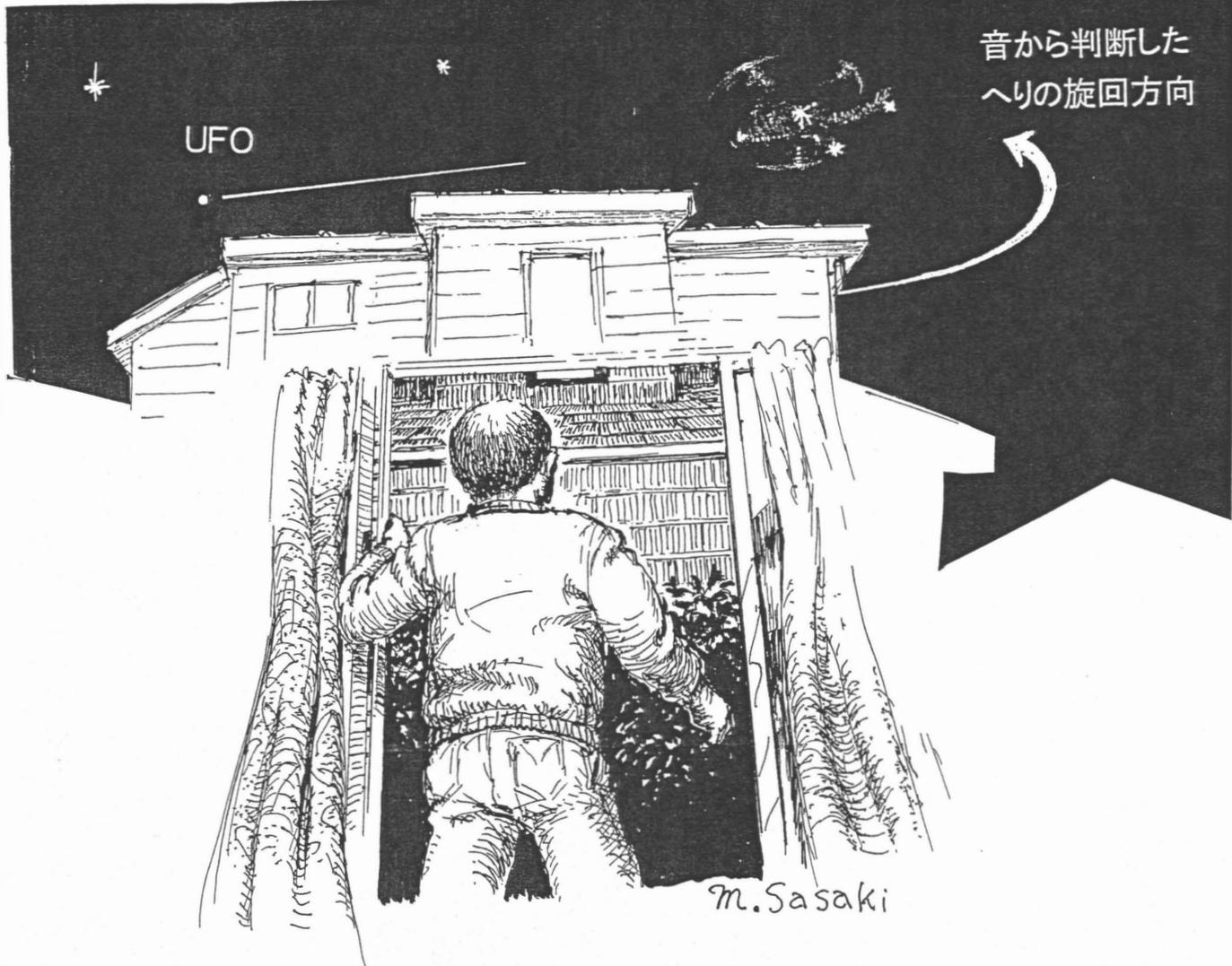
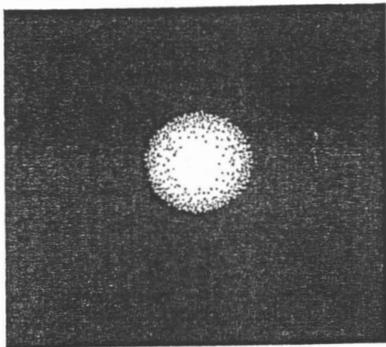
THE UFO RESEARCHER published by SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN, Printed in japan.

© 2007 SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN

小型UFOと、それを追う ヘリコプターを地上から目撃!!

2006年11月8日午後6時10分、茨城県守谷市にて

この二、三年、インターネットが普及して、旧知からの連絡がいくつかあった。ここに目撃報告を紹介する元CBA神奈川サークル所属の佐々木正広氏もその一人。彼は1960年代後半に16ミリ映写技術の資格を取得し、不知火調査、ハヨピラセレマニーなどCBAの歴史的イベントの映像記録を行ったことで知られる。編者は佐々木氏から電話で本件の目撃通報を受けて後、その内容を報告書の形で作成してほしい、と要請した。肉眼では光点ないし星状のUFOであり、図解の難しい内容であったが、かなり劇的な報告を戴いたので、この報告をメインに本誌の編集にかかった。合わせて、ヘリコプターUFO事件・目撃関連の資料も紹介することにした次第。



UFO目撃記録

日時:2006. 11. 8 PM:6時10分頃 天候:晴れ(上空に極薄い霞有り)
場所:茨城県守谷市大柏自宅
目撃者;本人のみ1名 目撃時間:約10秒
方位:南方向より南東方向へ30度移動 仰角:約45度より40度の空域を移動
形状:光点に近い2等星大 色彩:くぐもった蛍光色
速度:見掛けは人工衛星の2倍速(ヘリと等速度)
推定高度:100メートル弱(別紙高度推定図で判断したヘリと同高度の時)

目撃状況及び考察

この時期、陽の落ちるのは早く、夕闇が迫って雨戸を閉めダイニングで早めにくつろいでいた。すると、低空で近づくヘリのローター音がし、音が序々に大きくなり、爆音を上げて急旋回するのが判った。何事かと思い雨戸を開け南上空を見ると、ライトを明滅させて低空を飛行するヘリが眼前に有った。目撃図はその時のヘリの位置。

機体は夜目には薄っすらとしか確認できず、残念ながら機種及び所属は特定困難である。何気なくヘリの進行方向に眼をやると、2等星程の光体が同方向に移動しているのではないか。一瞬、「人工衛星？」と思うも、速度はその倍はある。いや、それはヘリと等速度で、まったくの等間隔を保ちながら飛行しているのではないか。「これは！」と思い、庭に出て両者を見比べながら見守ったが、やがて東南側の隣家の屋根に隠れてその姿を見失った。途中近くにいた家内を呼んだのだが、時すでに遅く、同時目撃に至らなかった。

UFOとヘリの位置関係だが、UFOは終始ヘリ本体の5~6倍程の延長線上の位置をキープしたまま飛行していった。ヘリの大きさととの比較から判断すると、UFOの実寸は野球ボール程度の小さなもので、恐らくはリモートコントロールされた偵察用のタイプと思える。

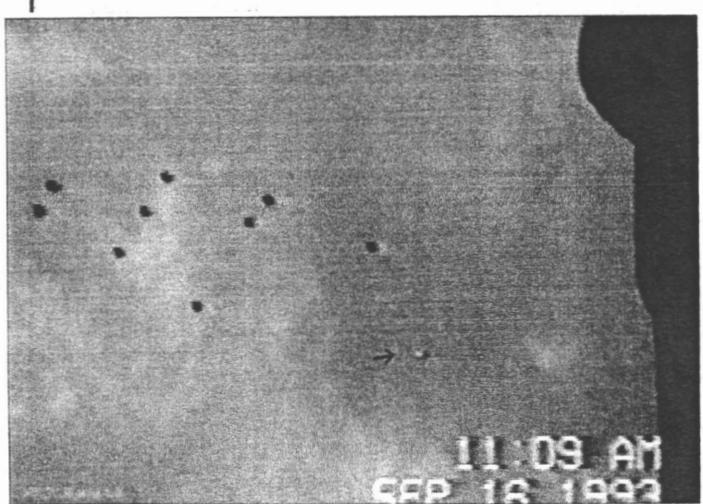
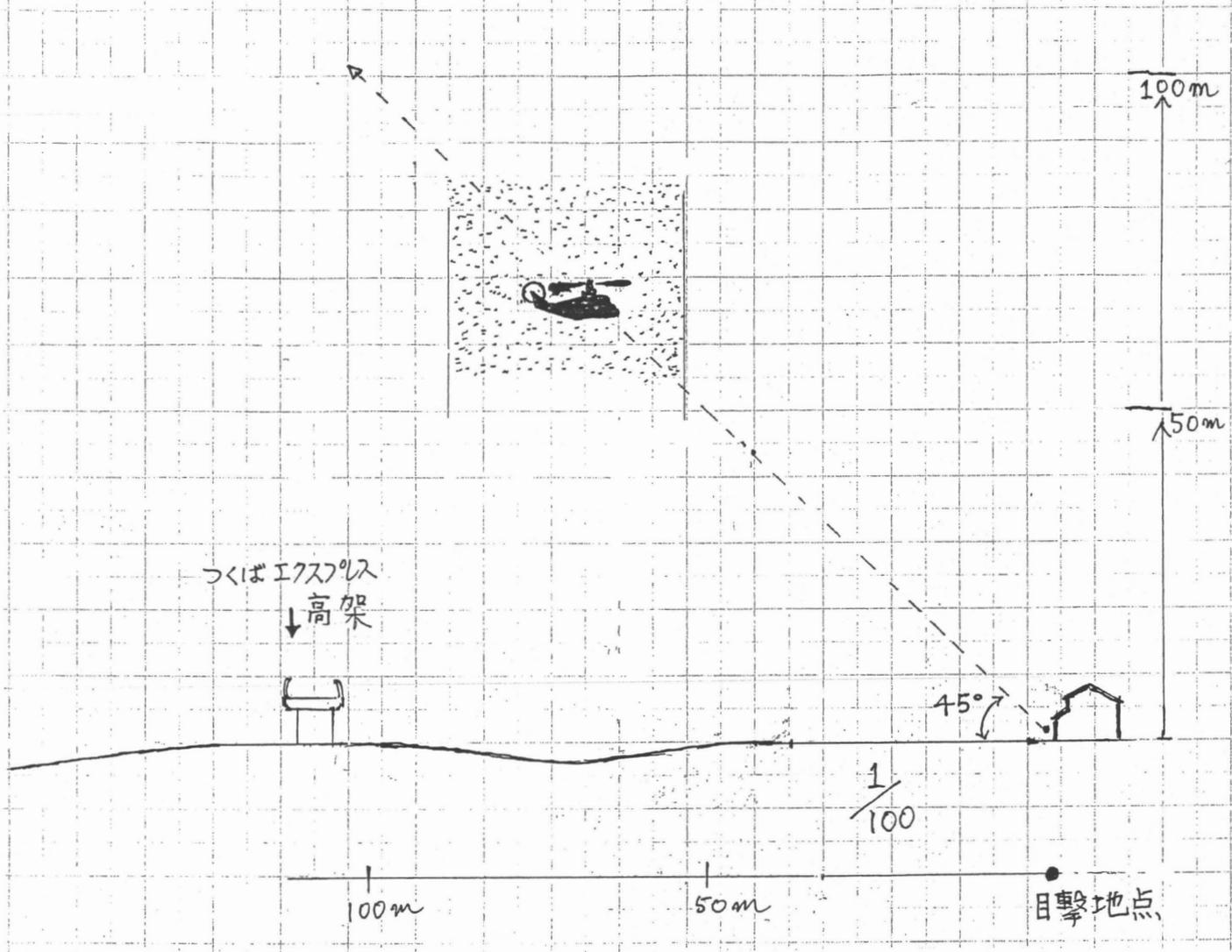
以下は推測だが、私が外を見るヤヤ前、飛行中のヘリのパイロットが進行方向を横切る発光体を発見、その正体を確認すべく追跡を試みたのではないだろうか。隣家に隠れ両者は視界から姿を消したが、暫し遠去かるローター音が響き、その後戻る事はなかった。

2006. 12. 1 記

佐々木正広



ヘリの飛行高度範囲



1993年9月16日午前11時09分メキシコ上空のヘリコプター群に謎の飛行物体が参加した劇的シーン

ヘリコプターとUFOの事例



The UH-1H Army helicopter in escape dive.

1968年ベトナム戦争非武装地帯においても、1975年の米戦略空軍核兵器貯蔵エリアにおいても、UFOの動きがヘリコプターのそれに似ていたのか「謎のヘリコプター事件」などと呼ばれた。

ヘリの能力を特徴づける「空中静止(ホバーリング)」や、「垂直上昇」また「垂直降下」は、確かにUFOが発揮する能力を「かたち」だけとはいえ真似た動きといえる。

また、ヘリコプターはそうした機能を利用した警察活動、防災活動、救助活動、病人輸送、資材運搬活動などを地上に近い空域でおこなうことが多く、未知なるUFOが接近目標とした場合、我々地上の者にとって、それを目撃する可能性は最も有り得る対象物である。

少なくとも、巡行高度10000メートル付近のジェット旅客機よりは、我々の身近な航空機といえるだろう。

劇的なヘリとUFOの出会いは、日本に一大UFOウェーブが波及していた1973年の11月18日に、米国陸軍予備ヘリコプター部隊第316医療支隊(ヘリ野戦病院)に起こっている。

この事件は、UFOが知的にコントロールされた地球外宇宙船説を立証する事件として、その種の懸賞の候補に上がったが、賞金を獲得したのかどうか定かではない。

この時の、ヘリの外観に似せたUFOは、軍用ヘリにグリーンレーザーを照射し、空中携拳の如く持ち上げてみせた。(絵はコールマン・フォン・ケビュツキー氏のメモランダムより)

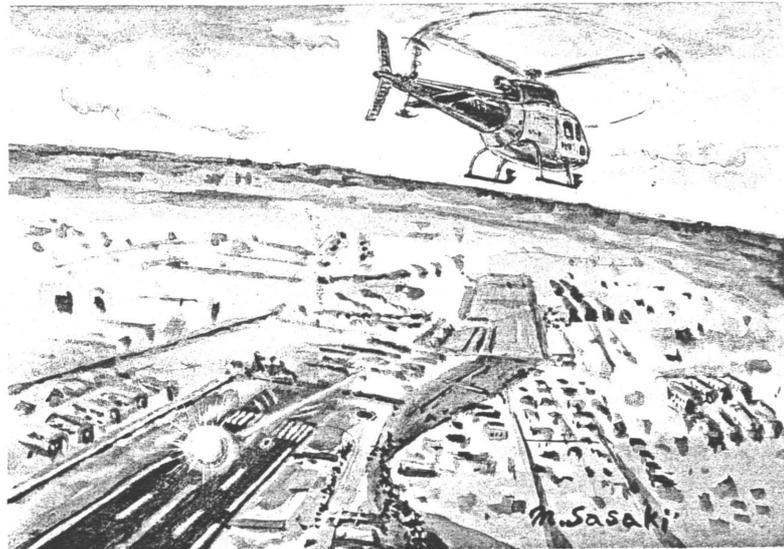
■1991年11月17日 八尾空港上空白光体

1991年11月17日午後1時、地下鉄谷町線終点の八尾南駅で大阪UFOサークル(OUC)の乾達也氏と待ち合わせ、天宮家族3人は、乾氏の車で八尾空港へと向かった。

「天宮さん、八尾空港に行こう」と乾氏が提案したのは1990年末のこと。一年ちかく経過して、ようやく実現にこぎつけた。

乾氏が編集した『OUC航空講座』の小冊子を読んで、八尾空港に離着陸する機種とサイズを学習し、前日16日の夜には、UFOの出現を願って、観測地の農地を何周も歩いて出現を念じた。

今回の観測の課題は、まず赤外線フィルムによる航空機の撮影であり、また2台のビデオカメラによる私と娘による撮影、そしてLEVEL ANGLE FINDERという角度測定



1991年11月17日八尾空港上空のヘリとUFO(イラスト:佐々木正広氏)

器に埼玉の井上保人氏制作の測定値読みミラーを装着した装置による仰角測定、見かけの大きさを妻が物差しで測定し、読み上げるのを録音すること。そして、エア・バンドの交信を傍受しつつ航空機の撮影を行うことになった。

赤外線フィルムの使用は、1990年羽咋市における「宇宙とUFO国際シンポジウム」において、ソ連のアジャジャ博士が述べた「可視光線外の紫外線ゾーン、赤外線ゾーンで何が起きているかを写真撮影で確かめる」という問題提起の実行にあった。紫外線は無理だが、赤外線フィルムは市販されており、コダック赤外線フィルムを購入した。

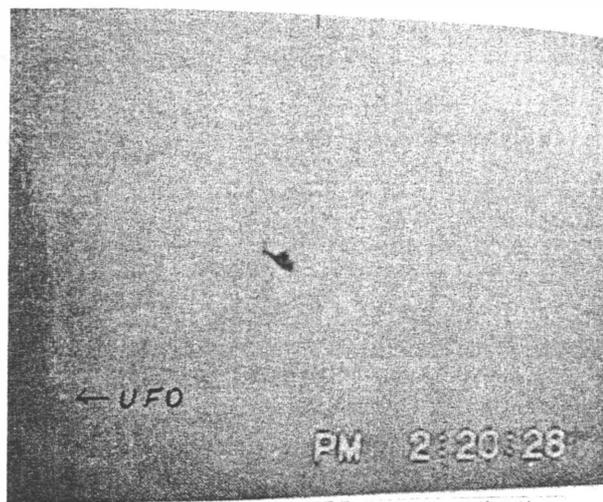
至近距離を飛行する小型機の視直径は10cm物差しを手にとって、腕を一杯に伸ばした状態で「センチ」「ミリ」を読み上げて録画。離陸後の速度と見かけ上の変化を記録した。

ビデオカメラのファインダーを覗きながら、装着した仰角測定器の数値を読むのは至難の技で、読むために視野から目標を外すことが度々あった。

航空無線録音は絶えず乾氏がビデオカメラのそばに近づけてくれていたので、良好な音声記録された。

赤外線写真はアサヒペンタックスSPの標準レンズ50mm、1/125 f16で撮影した。

○ビデオ2台に映りこんだヘリコプター近くの白光体録画したテープを見たところ、午後2時20分28秒前後、ヘリコプターが離陸して建物の屋根に沿って移動中の画



■1991年11月17日八尾空港にて撮影の8mm映像より。

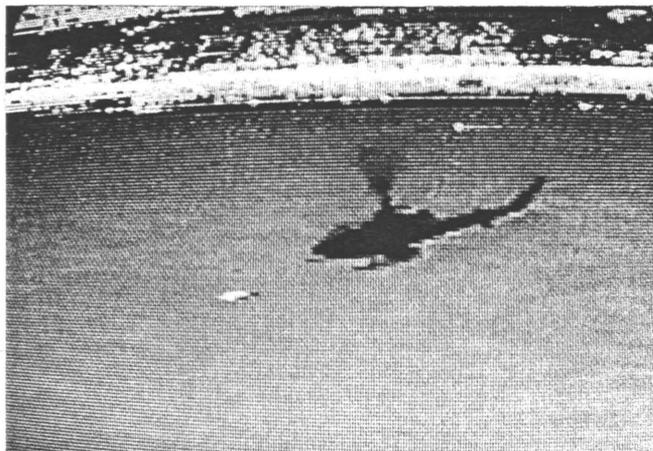
像に、白い光体がヘリとは逆方向に移動するのが映っていた。2台の倍率は異なるが、2台とも映っていたのは興味深い。また、撮影中はこの光体に気付かなかったため、瞬時に視野外に出てしまった。

ヘリコプターと共に映っているのが、対象物があるUFO映像ということになるだろう。

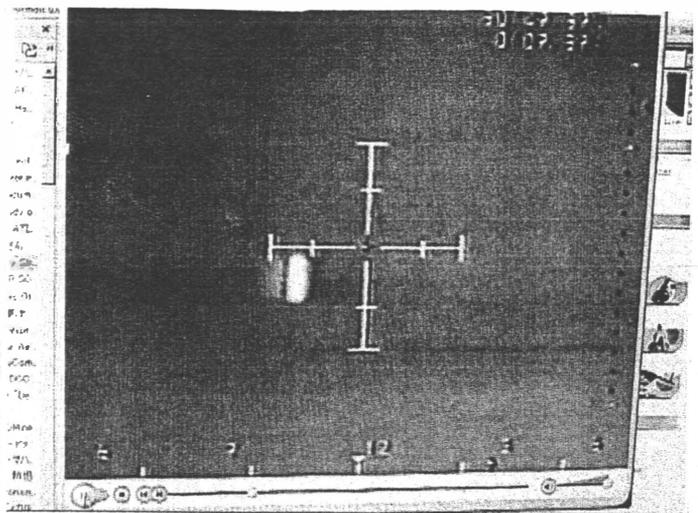
■千歳市上空、自衛隊ヘリとすれ違うUFO

この映像は、名古屋で放映されたUFOなどの特集番組で紹介されたもので、1992年5月28日、千歳市にある自衛隊演習場において、自衛隊員の栗野房雄氏が、たまたま訓練中のヘリを撮影していたときに現れたもの。白色の高速飛行体がヘリに向かい、すれ違った直後に薄くなって消失しているのが見事に捉えられている。

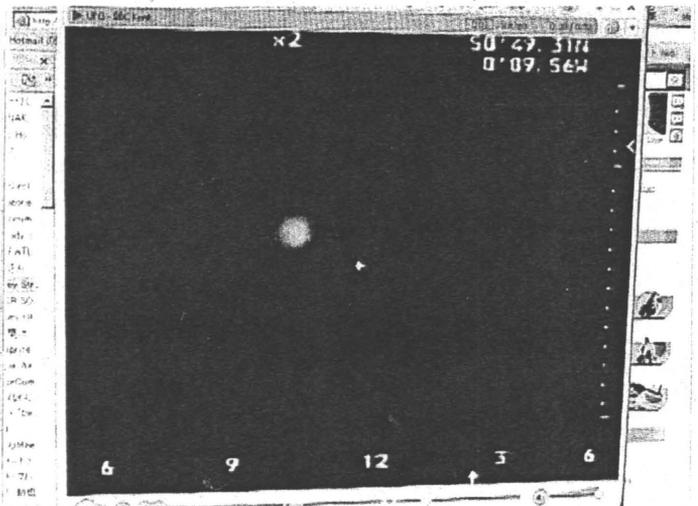
その再生映像をモニター画面からデジカメで撮った3コマを紹介する。



■1992年5月28日千歳市自衛隊演習場にて撮影の映像より



■縦長の白く光る物体。向かって右が進行方向。わずかに尾流が見える。



■町の灯火を背景に飛行する発光体。尾のない赤い球体だ。

■英国の警察ヘリ

2003年に英国サセックス上空のブライトン警察ヘリが、尾のない球状の発光体を追跡する映像が、ホイットニー・ストリーバーのホームページに公開された。

映像は2種類で、昼間と夜間。状況が非常によく似ている。ふつうUFO映像というと地上から空に向けて撮るため、背景はたいてい空か雲。ところがこれは空中のヘリからのフカン撮影になり、下界の景色や灯火を背景にしている。ということは、「目標」は撮影者と地上の間の空間にあり、その高度、速度、大きさについて、考察できる材料が豊富にあると考えられる。

撮影者は完璧に近い「追尾」で、目標を捉えている。このカメラが我々の手にする家庭用ではなく、目標を捉えるにふさわしい性能をもっているヘリ装備の一つと思わざるを得ない。手持ちによるカメラブレがなく、カメラの動きは極めて滑らか。真ん中に照準は、夜間撮影では光点として光っているが、これは通常のカメラにはない。

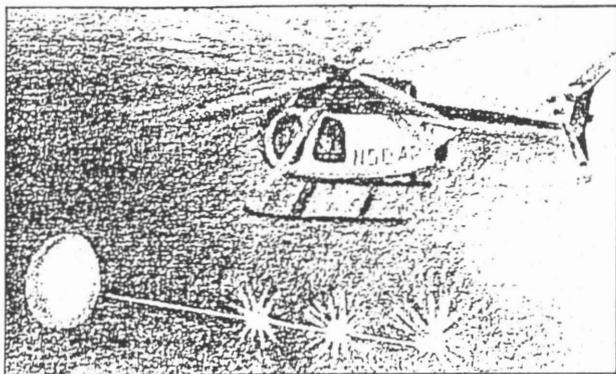
昼間の映像は円形ではなく、円筒というか長方形で“縦になったまま”飛行。日本では1971年10月3日に旅客機など全国各地で目撃され撮影された事件で、2枚の写真が白い棒を縦か斜めにした状態で飛行している様子になっている。

映像では2度ほど速度変化をみせ、追尾が少しズレる状態になる。

夜間の場合にはまさに火の玉状で、尾流や機影のない夜間発光体UFOの特徴を備えている。見た感じ、軌道が揺れているというか、すこし曲がったりしてるように思うのは錯覚なのか。下界の灯火が比較材料として終始映っている映像である。最後は光体が追尾を振り切って、目標を失ったカメラが「首振り撮影」を中止しているように見える。

■米国でも、警察ヘリはUFOの対象となるようだ。1993年2月26日、米ケンタッキー州ルイビル上空で、パトロール中のジェファーソン郡警察のヘリが、通報を受けた窃盗事件現場へ急行した際、風船のようにフラフラと上昇してきた西洋ナシ形の物体と遭遇。UFOからヘリに向けて「火の玉」が発射され、それはヘリ近くの空間で消滅した。

(J.S.P.S. 発行『UFO information』No.44 1993より)



■メキシコではヘリ群にUFOが混入

テレビUFO特番をご覧の方ならご存知の、メキシコにおける1993年9月16日午前11頃の空軍ヘリ群とみられる編隊の中にみられるUFOも見事なものである。

UFOは、地球製の航空機の近くに出現することで、「その形状の違い」「飛行能力の違い」「目的の違い」「知性の類似性」などを黙示的に知らせているようだ。

「知性の類似」という事は、「お互いに安全な関係を保つ」という意味がひとつ。つまり、UFOはSF映画の如く攻撃を仕掛けてはこない。衝突コースで接近したり、引っ張り上げたり、火の玉を発射する、という行為を、我々の認識範囲では「特攻」「拉致」「ミサイル攻撃」と解釈する向きもあるが、UFOとより密着した関係というものを考える上での考察材料とはなっても、「脅威」として警戒すべき事ではないだろう。(2007.1.1 天宮清)



編集後記

新年明けましておめでとうございます。今年もご声援をお願い申し上げます。

本誌『THE UFO RESEARCHER』2007年1号は、昨年12月29日までに編者の元に届いた原稿を年末年始の約3日間ですとまとめたものです。

年末のご多忙中、締切日に間に合わせていただいた各位に感謝致します。

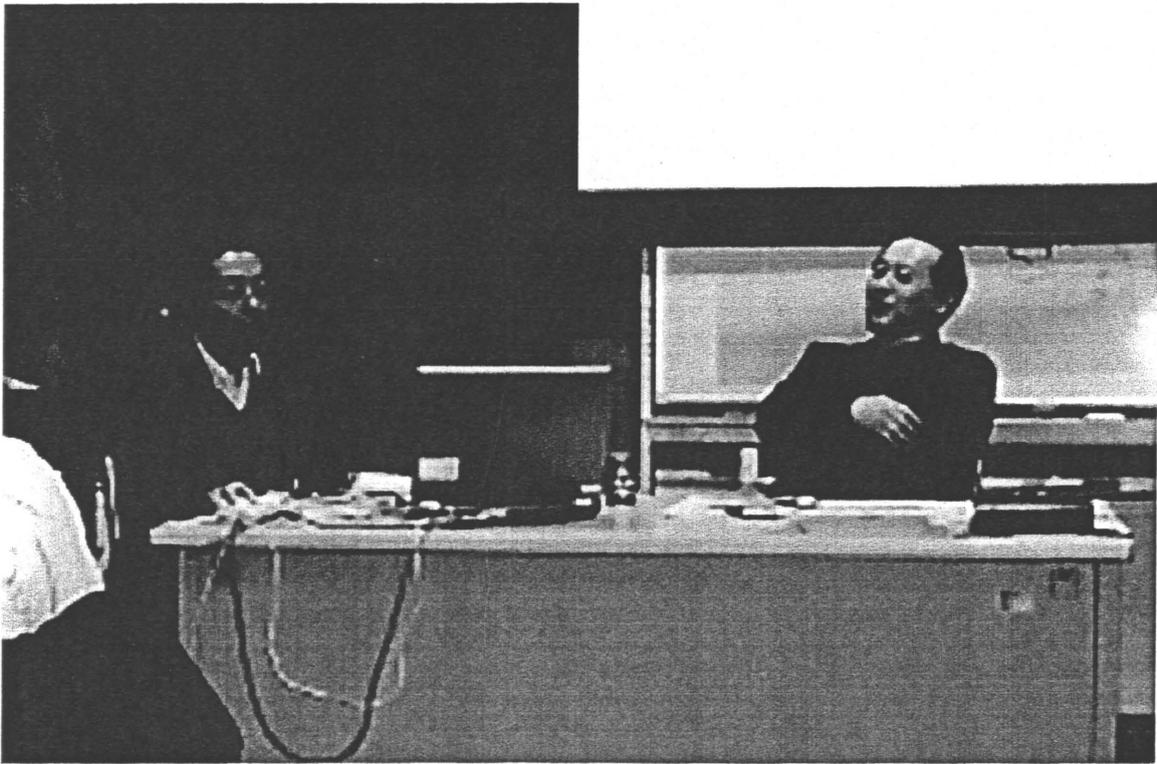
今回は、奇跡的に国内の研究者から様々なレポートが寄せられ、その熱意の重みが本誌編集に勢いをつけてく

れました。これは理想的な姿です。

編集者としては、可能な限り各寄稿者の原稿を損なわずに、添付された資料を可能な限り生かすことを本分と心得るものです。

記事の配列、図版の大きさと位置、若干の組み合わせ、誌面としての統一性など、編集者は「内容の分かりやすさ」「発展性」など様々な思惑を念頭に、仕事を進めます。

まさに一歩一歩ですね。手を休めると遅れる、眠過ぎると遅れる、他の用事を素早く済ませないと遅れる、というわけで、いま1月2日午前2時少し過ぎ、もうすぐ完成です。天宮



■介良UFO事件・山梨UFO事件調査者林一男氏(向かって左)と並木伸一郎氏(向かって右)

並木伸一郎氏を迎えてのOUC特別例会に参加して

2006年12月10日 大阪市立総合生涯学習センター

10年前ころからOUC(大阪UFOサークル)の主催する「UFOフォーラム」の企画の段階で、「並木伸一郎氏を呼べないか?」という山野会長からの希望があった。しかし、月刊誌『ムー』の主要ライターであり、大量の単行本の執筆者である並木氏の多忙さと、当時の体調不良を考えると、なかなか実現できそうになかった。

しかし、今回、並木氏の設立したJ.S.P.S.(日本宇宙現象研究会)の大阪支部長でもあり、並木氏と共に山梨UFO事件の調査を行った経歴を持つ林一男氏によって、並木氏来阪が実現した。これは日本UFO史に残る出来事と言えるだろう。

並木氏をゲストに迎えた会場の参加者は極めて多彩。編者の顔見知りといえば、大阪UFOサークル関係者、日本UFO調査・普及機構(OUR-Jアワー・ジェー)のスタッフの方々だけだが、初めてお目にかかる方々の中には、かなりJ.S.P.S.の関係者がおられた。名前だけで資料提供など御世話になりながら、面識の無かった方とも、この場で初めてお会いできたことは、編者にとって幸いだっただ。

■自己紹介

会場となった大阪駅前代ビル5階・メディア研修室は、定員24人の大きな部屋で、一人一人のテーブルの上にノート・パソコンが設置されている。あちこちで「ポロローン」という立ち上げの音が聞える。しかし、今回はこのパソコンを活用する余裕はなかった。

参加者は圧倒的に男性が多く、女性は2名ほど。たぶん大阪近隣から来た多彩なUFO関係者の集まりであろう。周りを見渡して人数を数えてみると、約20人。山野会長の司会で会は始まった。

編者は、立ち上がって自己紹介する一人一人の言葉に耳を傾けた。

空飛ぶ円盤との出会い、その多くがアダムスキーの体験記であったようだ。各自の言葉を聞くうちに、いろいろな思いが生じた。

友好的な宇宙人と会見し、彼らの進んだ科学と文明、そして何よりも精神的に優れ、戦争や悪事のない理想的な生活を、「金星人」はアダムスキーに語った、という。

それならば、我々も、金星のようなユートピアが出来るのではないか、そのためにこそ、UFOを研究・学習しよう、そういった善意のUFO愛好家の憧れの目標として、アダムスキーはあった。

しかし、40年50年と年月が経過してゆくなかで、学究的UFOの態勢は「アダムスキーの撮影した円盤は、模型を使ったトリック写真」ということになり、やがて写真の真偽から離れた、アダムスキーの

説く宇宙哲学を学ぼう、とする思想的・精神修行的分野が誕生し枝分かれしていったようだ。

空飛ぶ円盤問題がUFO問題となり、各種の陰謀論、ことに「アメリカ政府はUFOの真実を隠している」という論に高まると、UFO研究は社会批判の道具として機能すると共に、新しい科学とか超能力といった新奇な現象の普及と、世紀末ブームの生んだ新奇な思想、それを信奉する団体や組織が様々誕生し、やがてオウム事件という決定的な社会悪が発生、UFO・宇宙人・心霊・超能力といった神秘の締め出しと、国家の安泰を優先する転換点となったかのように思われる。

「最近、新聞でもテレビでも、UFOが取上げられない。これはどうしてか？」この問いに対して、並木氏は断言した。

「新聞はUFOという言葉を使わないようにしている」と。オウム事件後、テレビがUFO番組を自粛する、という話は聞いた。やはり新聞もそうであったか、という感想をもつ。

このレポートを書いている今朝の朝日新聞(2006.12.24)でも「謎の飛行物体チリの夜空に-実は日本のロケット」という記事にも、従来なら「UFO」の文字が一箇所でも記載されそうな内容だが、季節柄が「サンタクロースのそりを撮影か」といった文章になっている。

また、12月20日に滋賀県の山中に墜落した飛行機の捜索を報道する記事でも、「ブーメランの形をした飛行機のようなもの」という表現から、従来の我々ならUFOの可能性を模索するが、やはりそうした逸脱はみられない。当然といえば当然なのだが、昔のような「スワツUFOか?」といった安易な結びつけはなくなったようだ。

■並木氏は語る「99.9パーセントは擬似UFO」

いよいよ、並木氏の話が始まる。司会者の山野氏が「本来なら並木先生とお呼びするところだが、並木さん、でよろしいか?」に対し「ぜひそうして下さい」との即答。

また、並木氏の独演ではなく、壇上隣に座る林一男氏との掛け合いで、様々なテーマを取上げる趣向がとられた。

並木氏の雄弁な語りと落ち着いた太い声が、会場を圧倒した。編者はビデオカメラを回しつつ、メモをとり、写真を撮ったが、テープの残量を考慮しなかったため、録画は20分程度。しかし、並木氏のUFO体験的発言はしっかり録画した。

並木氏によると、子供の頃、凧揚げをしていて、白いものが二つに分かれて飛んで行くのを目撃したり、その他、不思議な物を見たとのことで「それが何かはわからない」とのことであった。

また米国のエリア51を取材中に、地上からフワツと上昇し、再び降下する謎の物体を2度目撃したとのことで、この件については『ムー』誌でも見た記憶がある。

並木氏はまた最近の『ムー』誌でも取材報告で述べたように、米国におけるロズウェル事件は、外宇宙からの宇宙船によってもたらされたものではなく、米国の軍事的な理由、殊に核兵器関連の秘密工作を隠蔽するための隠れ蓑であり、同様な「核に関する軍事機密」をカムフラージュするために、「UFO」が利用される、と指摘した。

OUCの山口氏による「マンメイドUFO」の事例と図解による配布資料の解説に対応して、並木氏は、現在までに話題となっているUFO目撃、事件は99.9パーセントが地球側の秘密兵器あるいは開発途上の新型航空機・実験の誤認の可能性を指摘した。

例えばアーノルド事件においても、当時ドイツで開発中の「全翼機」との類似があり、地球外からという「定説」に、問題を提起した形となった。

このような「マンメイドUFO」のテーマに対し、司会の山野氏が、「我々はUFOが宇宙から来るということで興味を抱いてきたが、それが地球製ばかりだとなったら、興味を失うのではないか。その点、皆さんの意見をお聞きしたい」との提案がなされた。

これに対して、会場を代表して何人かが意見を述べた。

■出席者からの顕著な目撃体験発表

編者のすぐ隣の席に、山田晶啓(あきひろ)さんという方がおられた。年齢60歳。彼は火星接近の時、円い紫色の光体が蛇行飛行するのを見たり、1956年以前、小学校の8月の時に、ほうき星状の光体が北から南へ向かうのを二晩続けて見たとのこと。その光体の明るさは肉眼で見るエコ衛星(1960年代に低空を周回していた巨大な風船衛星で、見かけは木星ほどに見られた)ほどであった、とのこと。

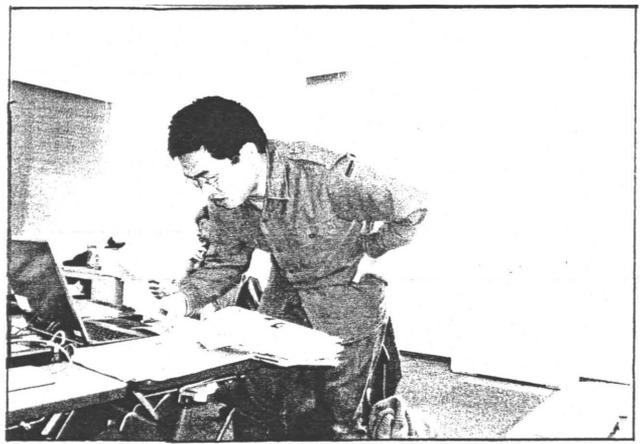
また彼はテレパシーは信じていないが、当時、CBAの話とか聞くうち「出たら良いなあ」と思った。高校2年の時、テレパシーで呼んでみた。そうしたら朝から「今日は絶対に出る」という確信が生じた。

更に「塾の帰りに、この場所に来たら出る」という具体的な確信となった。

そして、塾の帰り、午後9時分から30分頃、その場所に立ち「来るぞ」と思って1分たつたたない



■アワーJの福井さん(左)と築瀬さん(右)



■マンメイドUFOについて発表するOUCの山口氏。

ちに、それは現れた。ビックリして声を出した。

その夜、天気は良好だった。UFOは西から東へ向かっていた。紡錘形でドームがつき、ビリビリ震える感じの、ハッキリしたUFOだった。下部中央にピンクの光がみえた。

しかし、他の証人がいなかった。見かけの大きさは満月大だった。

■「なぜ、国家予算を使ってまでもニセUFO情報を流すのか？」

この疑問を提起したのは、OUR-Jの会合でもエイズの陰謀説を提起した方で、自衛隊におけるUFO遭遇の未公表問題など、裏事情に詳しい方。彼の発言から。

「最新の科学技術は権力者のためにある」「陰謀のない時代はない。一部の権力者が世の中を変える。農民は生かさぬよう、殺さぬよう、権力が住み易い世界を作っていく、これは別に変な話ではない。それにしても、なんで国家予算を使ってまでもニセUFO情報を流すのか？」

まさにUFO問題が権力者側から嫌悪される深層を衝く感じである。

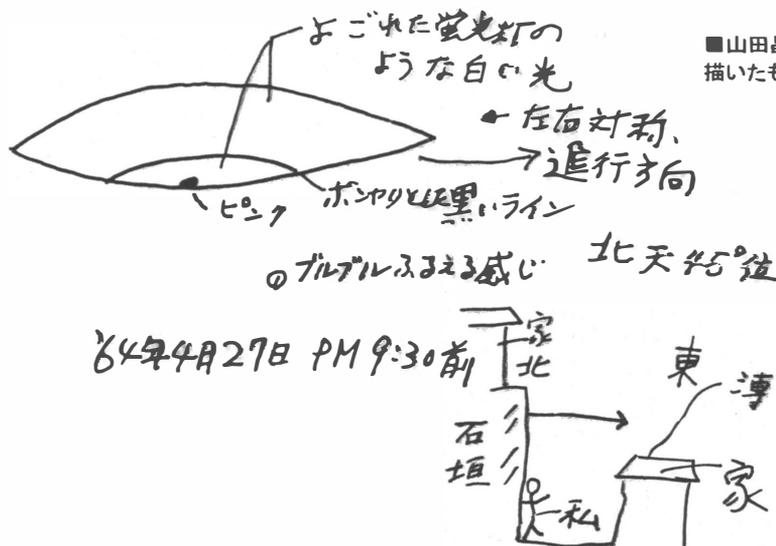
■「同じUFO現象が、地球上の離れた複数地点で発生したら・・・」と並木氏

その複数UFOの起源が地球外にある可能性を考慮しなければならない、と彼は言う。

このテーマは次回持ち越しとなりそうな、重要課題といえるだろう。我々は夢とロマンに幻惑されて、変わったものは、なんでもUFOに見えてしまう「希望観測的な意識」を持っている。これは否定できない。

そうしたあいまいさは、多くのUFOファンが集まる素地ともなってきた。しかし、世界のUFO研究の趨勢を俯瞰し、日本人が「厳正さ」をもって世界に臨もうとするなら、並木氏の言う「99.9パーセントは疑似UFO」という態度で取り組む必要があるだろう。

また、地球上の科学技術の最先端がどのへんまで進んでいるのか、この課題も重要である。そうした分野は、一人がいくら頑張っても限度がある。多くの知恵と、多くの情報探索を集合させるネット社会の活用が求められる気がする。(2006.12.24 天宮清)



■山田晶啓さんが目撃したUFOの図。本人がボードに描いたものを撮影し、そのプリントをトレス。

馬上氏のUFO目撃・撮影、その後も継続

東京世田谷の馬上俊哉氏(1983年～)は、2004年8月18日夜、至近距離に接近した小型のUFOを撮影。その写真は中国山西省UFO研究会発行『空飛ぶ円盤』誌を通じて中国のUFO研究界にも配信された。

馬上氏からは、その後も様々なタイプのUFO目撃報告と、200mm望遠によって撮影したUFO写真が寄せられ、その目撃報告の一部は『天宮UFO研究室通信』に発表したが、写真はコピー印刷では分かりにくいいため、発表を控えていた。

なんとか東京に赴いて、フォト・ビデオによるネガの拡大を試みようとしたが、なかなか果たせず、結局年月だけが経過してしまっただけだった。

とりあえず、その後に届いた目撃・撮影報告から紹介する。

■2005年2月5日

観測のため、自宅から羽根木公園に行く途中、代田の公園付近に通るかかると、前方の西の空、仰角20度のところに、白色に強光する光を発見。手持ちの腕時計は忘れたが、公園に時計があり、午後4時55分だった。

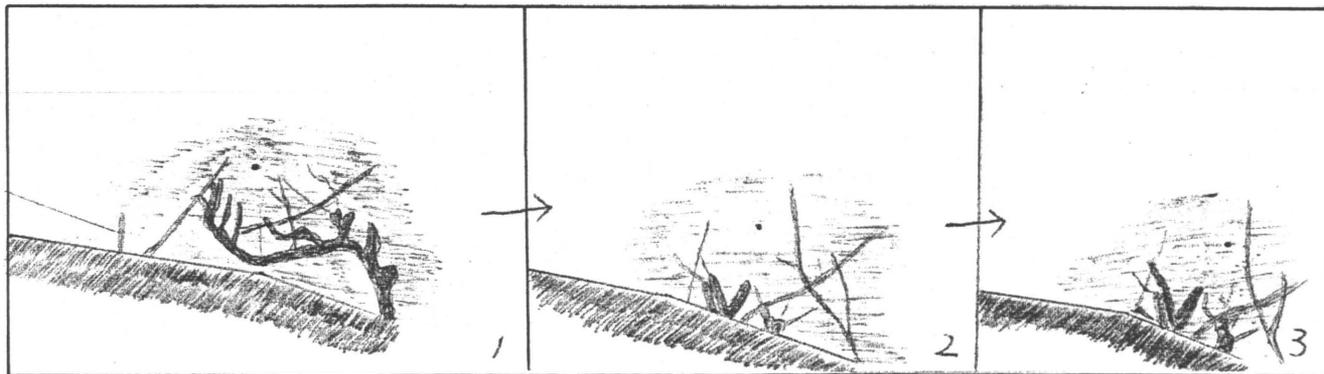
光は最初強いが、次第に弱くなり消える。約1分間で、



■馬上俊哉氏

音は聞えなかった。その後、羽根木公園方面に行くと、ふたたび光を発見。何枚か撮影(AUTO、望遠、カメラはアサヒペンタックスで100～200mm、フィルム感度ISO400、絞り5.6、目撃時、オレンジ色と記憶)。継続時間は覚えていない。その後、何度か目撃撮影したが、写っていない。

平成17年3月2日 馬上俊哉



■2005年9月23日

- ・撮影日: 2005年9月23日 午後6時から7時
- ・目撃場所: 自宅二階の階段付近。(外の)
- ・天候: 曇りで雲多く風少々。
- ・カメラはアサヒペンタックスMEで望遠200mm、フィルム感度ISO400。
- ・シャッター速度: B。絞り: 5.6

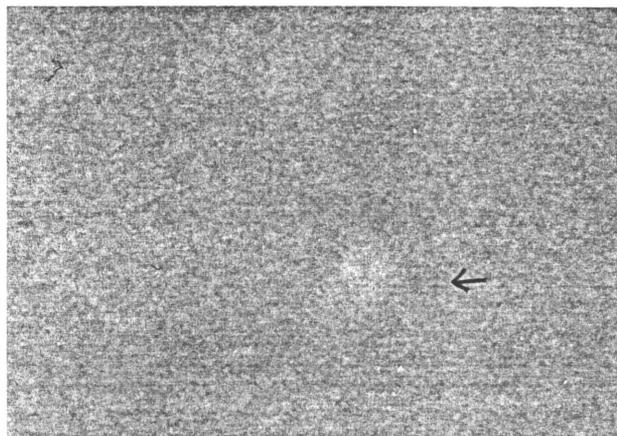
帰宅の際、外の階段を上り、二階に着くと何気なくNW方面に目が行き、空を見ると、星のような白い光を発見。時々、雲の流れで光を見失うが、位置に変化は見られない。また微妙な明るさの強弱が見られる時があった。

最後は自分の視界から光が右側に少しずつ位置が変わった。

(雲の流れで見失い、晴れると位置が変わる。)

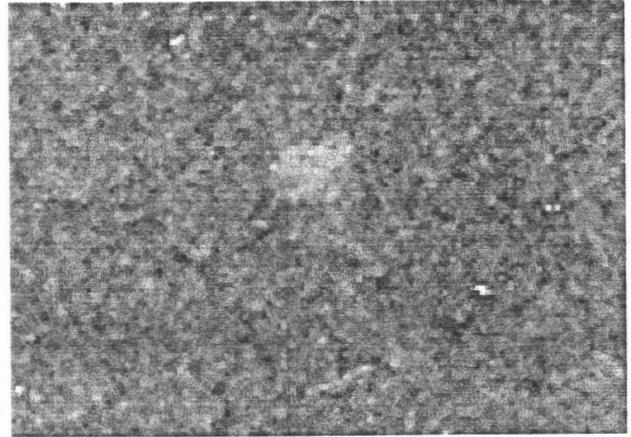
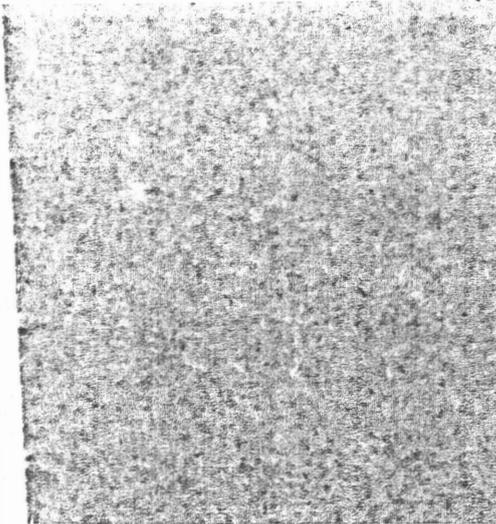
光は次第に弱くなり、見えなくなった。目撃の最初から最後まで、周囲に星は確認できませんでした。

平成17年9月28日 馬上俊哉



■馬上氏から提供された14枚の連続写真の中央に、薄いピンクがかかった光体が写っている。これを白黒コピーにしたが、ほとんど背景と溶け込んでしまい、ここに掲載できないので、最も明瞭な写真を部分的に拡大してみた。

この写真は「No.1」なので、最初の一枚目である。Lサイズプリントで、光体の長径は2ミリ。手ブレもほとんど無い。



■これは別の日に撮影したもので、Lサイズプリントの中央に明瞭な輪郭で円形の光体が写っている。プリント上の直径は1ミリ以下。それを拡大すると、輪郭が明瞭なため、背景と同化することはなかった。矢印の延長の白点がそれ。

■9月23日撮影の「No.8」の拡大。テレビアンテナ、電線などはブレもなく明瞭に写っている。ハルブ撮影で、ここまで固定できるには、相当な集中力を必要とする。

光体はやはりピンクがかかった色彩で、編者が1989年12月10日の午後3時に撮影したものとよく似ている。プリント上の直径は1.5ミリ。丸というより三角形に近い。



■雪景色に見たUFO

1963年又は1964年、横浜に初雪の降った日の1月16日。
(当時高校1、2年)

ス〜と、白く光ながら降りて来た光点は、途中からフラフラとゆれて、中心が黄色く、周辺がグリーンに輝く色に

変わり、スッと消えていった。その間、約3秒。

後はシーンと静まり返った雪景色があった。
(細かな記録は、観測ノートを紛失してしまい、今は残っていない。)

2006年12.16 佐々木正広

目撃体験を振り返って

目撃日時：1962・10・10 午後8時35分
目撃場所：横浜市南区宮元町4-87 自宅車庫屋根
方 角：南南西から東南方向
仰 角：50度から約40度
高 度：500m以下？(最接近時の風切り音から考察)
飛行時間：4秒（ニュース誌記載）・実際は10秒以上。
目撃者：佐々木 正広

過去、幾多のUFO目撃体験をしてきた私であるが、現在その記録はほとんど紛失してしまい、それぞれの目撃事例は年月とともに不鮮明なものとなりつつある。

只、これから記す事例は「空飛ぶ円盤ニュース」1962年12月号に掲載された私の目撃報告で、日時の特定が出来るものである。又、この時の体験は自身の数々の目撃の中で特に印象に残っており、40年以上前の目撃体験でありながら今でも深く、鮮明に私の脳裏に焼きついている。

しかし、当時の私には文章力がなく、稚拙な表現による記録しか残せず、又、目撃画もCBA本部の誰かにレタッチされて正確な物ではなかった。ニュース誌の目撃画を見る限りでは、まるで大流星の落下を目撃したかの様に誤解されかねないので、作画した「飛行状況図」を参考にされたい。事實は、夜空からUFOがヒラヒラと降下し、一定高度に達するや出現空域から東に向けて飛翔、その間常時尾流を放出、尚も輪郭左右から間欠泉の如く光粒子の噴出を4回繰り返した。

花火で言えばナイヤガラのような光の粒だが、輝きはそれよりシャープなものであった。UFOは飛翔しながらも降下し、再接近時は視直径で満月の二分の一であった。飛翔しつつ上昇、一定高度に達すると尾流を止め、マイナス3等星大の視直径まで急角度で昇り滞空。その後段階的に上昇と滞空を3回ほど繰り返し最終的にポツンと2等星ほどで滞空、スッと夜空に姿を没した。事實は以上である。

2006. 11. 21 記

佐々木 正広

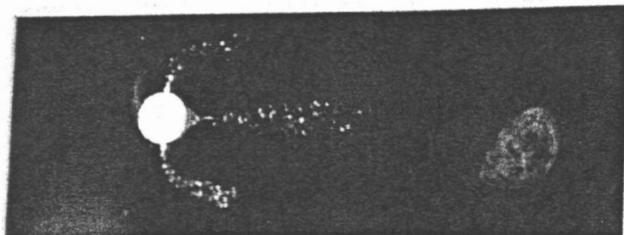
飛行状況図

- A・・・プツンと2等星位の光が現れた。
A→B・・・光がヒラヒラと急角度で降下。「何!？」この間1秒。
B→C・・・ある程度丸い形が認識出来たと思った時、東方向に滑り出すように光の尾流を引きながらさらに降下を続ける。
本体輪郭両サイドより4回光の粒子を噴出しながらヤヤ上昇して行く。再接近時の視直径は月の直径の二分の一。思わず息を呑んだ。
B→C飛行中は微かなシューーという風きり音が聞かれた。
この間約4秒。
C→D・・・尾流を止め角度を上げて上昇しマイナス3等星クラスで滞空。
この間約2秒。
D→E・・・滞空状態から段階的に、上昇、滞空を3回程繰り返して2等星程の大きさになってポツンと暫し滞空。スッと消滅。この間4秒。

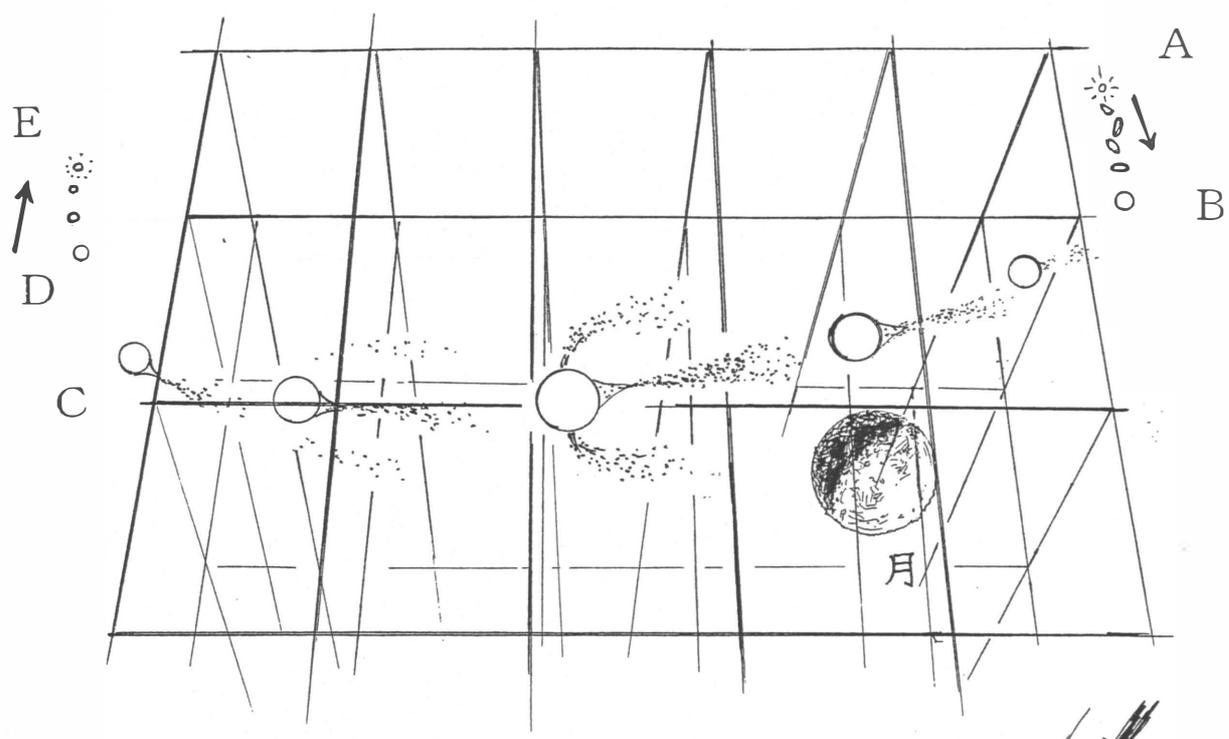
物体の形状及び噴出する光の粒子

本体は完璧な真円。くっきりとした輪郭で、フォースフィールドによるボヤケは認められなかった。月よりも丸い非の打ち所がない円形は、見事という他なかった。「球」という印象は無く、鏡の様な平面。「円盤」という表現が的確であろう。光度は月よりも明るかったが、この輝きが私や周辺を照らし出したかは不明。ただただこれに圧倒され、見入るばかりであった。

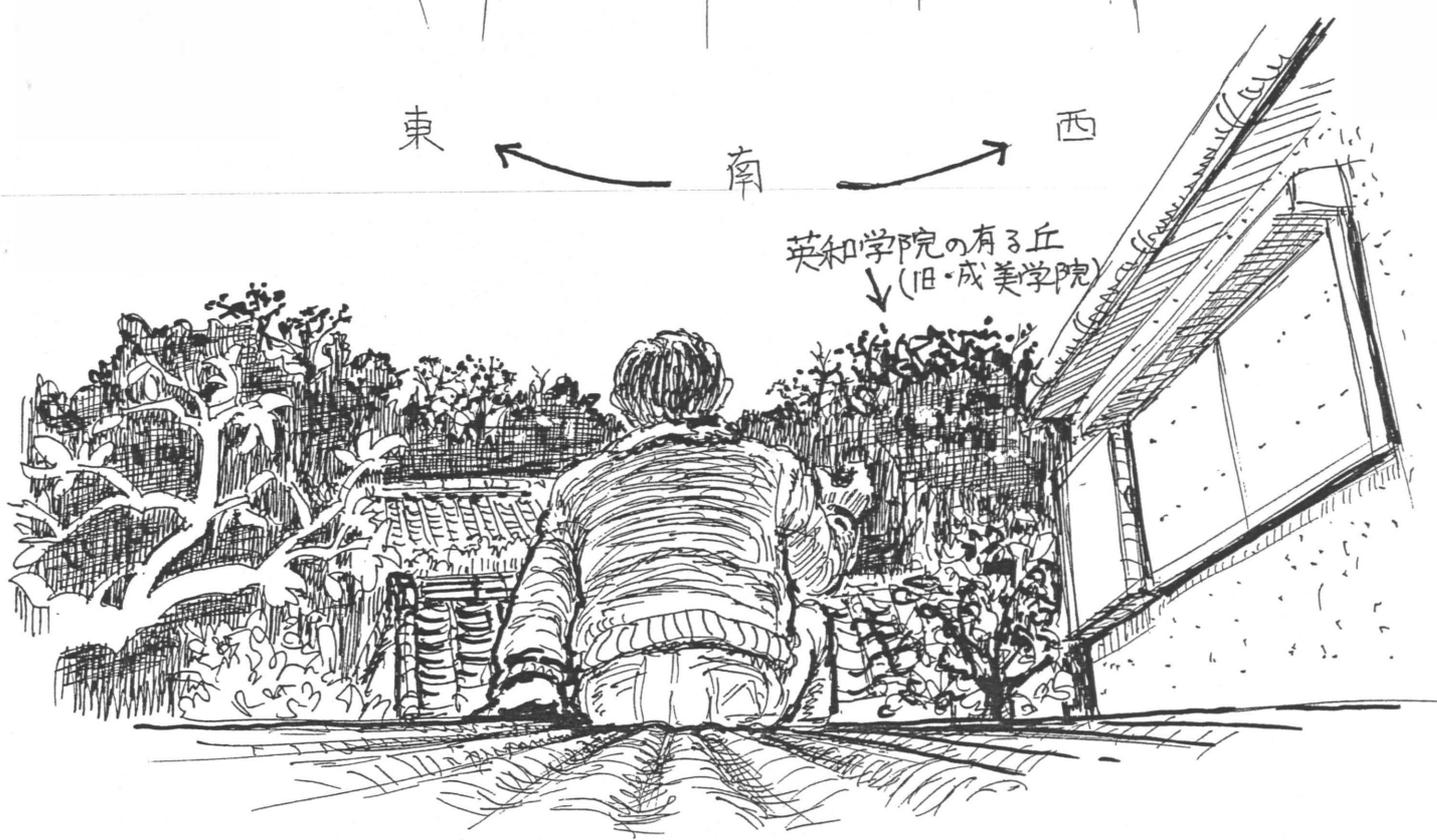
色彩は気持淡い黄色掛かった銀白色。進行方向後方には三角形を引き伸ばした形の、やや黄色で半透明の光のヒレが有り、その先端から常時金白色の光の粒子が噴出されていた。ヒレの形状に関する考察だが、これは物体の飛行による空気抵抗の自然な所以であろう。突然、本体輪郭の左右中心部より間欠泉の様な光粒子の噴出が起きる。色彩は尾流と同じ金白色であり、噴出の瞬間は光粒子が渦巻く様子が確認出来、これは焚き火等で火の粉が舞う様子と同じで、明らかに大気の中に於ける物理現象と言える。この両サイドからの噴出は約1秒間隔で4回繰り返されたが、それはまるで、人が両手を振って励ましの合図を送ってくれるかの様な印象を受けた。



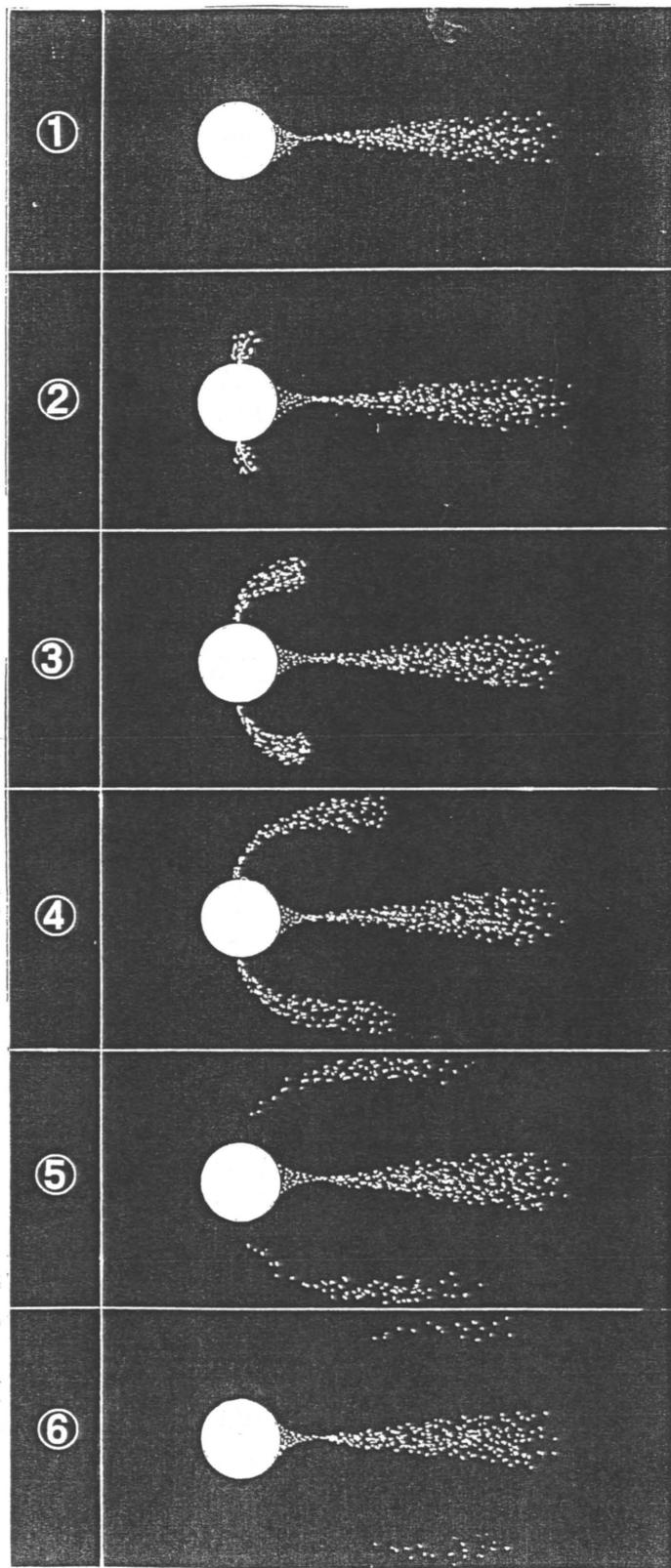
■佐々木正広氏は、この目撃を月との比較で表現すべく、5年程にアニメ用セルに気流部分を遠、中、近に分けて描き、それぞれを額に入れて室内に掲示した。
これは、その一枚で、この絵を見るたびに、当時の目撃と感動を常に思い出す、と述べておられる。



東 ← 南 → 西

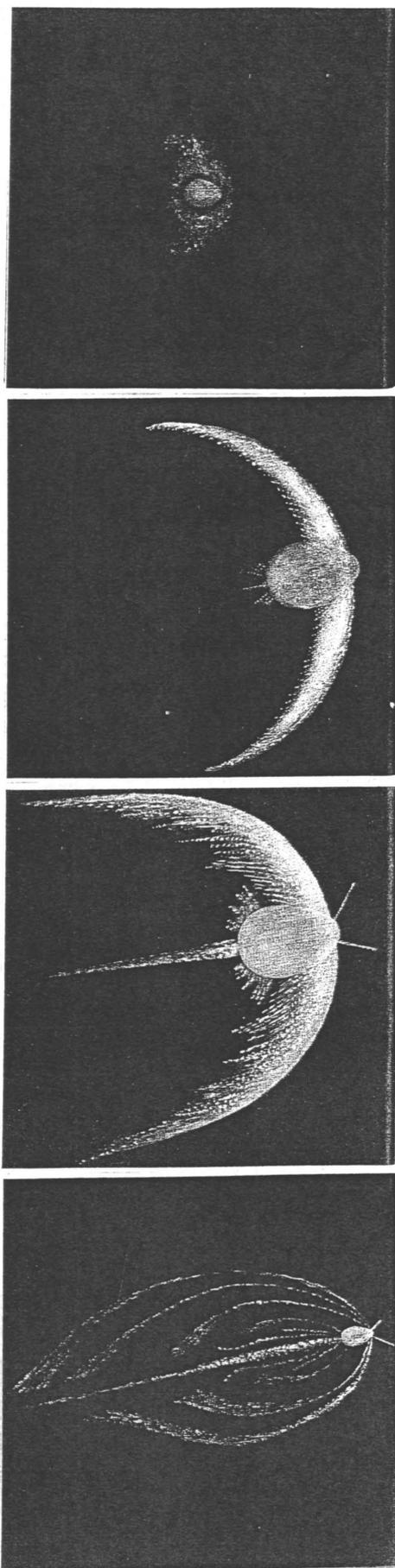


両サイドより噴出の光粒子の動き
①～⑥まで約1秒。⑥→①へ戻る。

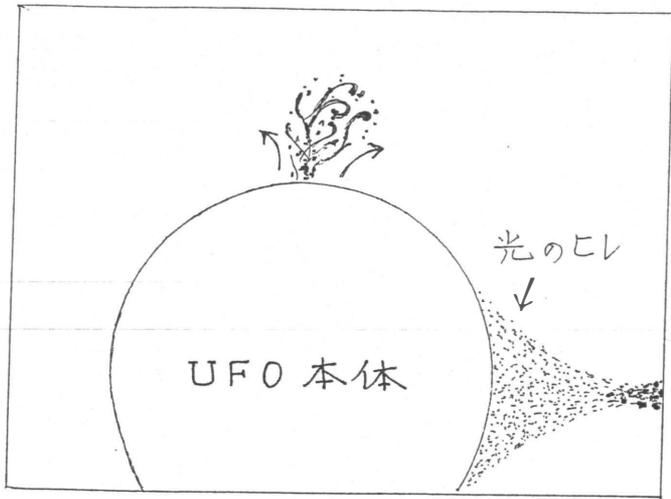


■佐々木正広氏による目撃物体の図解

■類似現象としての一九八〇年六月十四日夜モスクワ近郊上空のUFO図との比較



■二見書房刊『モスクワ上空の怪奇現象』より。

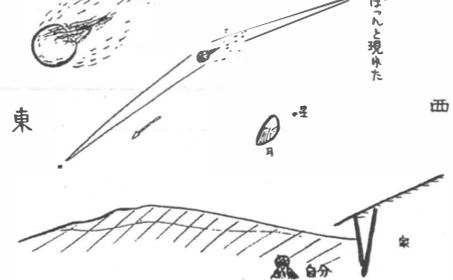


噴出の瞬間。渦巻く粒子。

1962年12月号CBA『空飛ぶ円盤ニュース』に掲載されたものー

②去る10月10日、何か円盤が出現しそうな気がしたので屋根に出てテレコンをやり出した。10分ぐらいして、ポツンと何かが見われたので「姿だな？」とっていると、それが急に大きくなり、白い粉のようなものを落したかのように飛行して行った。あまりのおどろきで声が出なかった。

西の空仰角約50度出現、東方へと形状



飛行。大きさ月の半分位、白色で約4秒間飛行。午後8時35分。(図参照) 関東学院2年 佐々木正広

私の眼にした物は幻影だったのか

否！！

その事象は、まぎれもなく我々の呼吸する大気の中を駆け抜け

その物理的影響を受けながら

飛び去っていった

決して世人の言う異世界の物ではなく

我々と同じ次元に実在する「意志を持つ者」の姿なのだ

この後、生涯体験し得ぬやも知れぬこのUFO目撃の事実と

あの時の感動を

私は、自身の記憶の中に留めなければならない



■佐々木正広氏の自画像

←目撃当時に発表された『空飛ぶ円盤ニュース』。右上は掲載された一部。(本稿と同一の目撃)当時、目撃者の直筆画は、担当者が描き直していた。

入道崎リサーチ

～ 照明弾か? UFOか? ～

日下部 典子
(山形県酒田市)

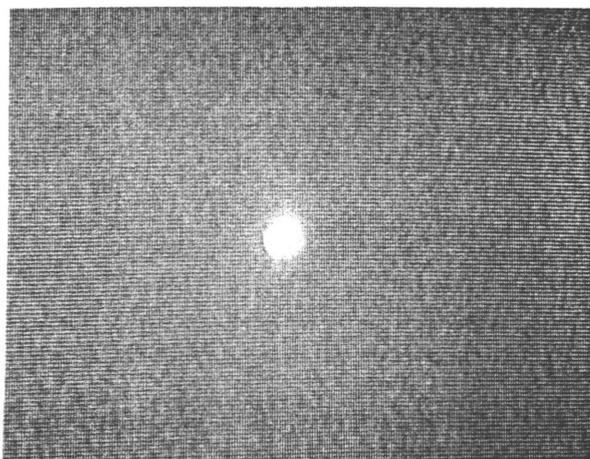


2003年9月16日、秋田県男鹿市入道崎で、鎌田昭雄さん(当時62才)撮影の、暗闇に浮かぶ光る物体が、海上保安の海上救難訓練の照明弾ではないかとの見方があるようです。確かに映像では、照明弾で説明がつく点もあるようですし、私自身、秋田の海上保安に問い合わせてみましたが、「毎年、年間を通して入道崎沖で、照明弾を使用した救難訓練は実施されています」との返答もありました。

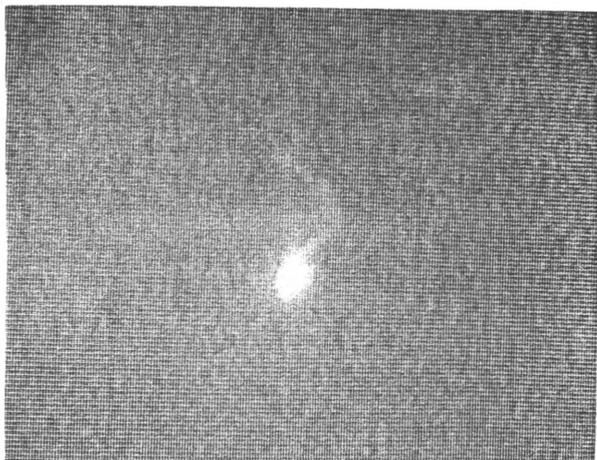
しかし鎌田さんご自身は、照明弾では納得できない点が幾つかあるようです。実際、鎌田さんも、自分の見間違いではないかと問い合わせたり調べたりしたそうです。でも、照明弾であったとして納得できない点は、「物体は海上ではなく、陸の上やすぐそばの芝生にいた」と言うのです。

それから他にも、「私もUFOを見たことがある」という男鹿近辺の目撃情報が、鎌田さんの元に次々集まっていたので、情報を頼りにその方々の元へも私は訪ねて行きました。

今回、この場をお借りしまして、鎌田さんを取り巻く様々な状況も含め、男鹿・入道崎をレポートしてみようと思います。私からの視点で拙い文章ではありますが、目を通して戴けたら幸いと存じます。



その日の夜7:30頃、入道崎で『みさき会館』を営む店のご主人・鎌田昭雄さんは、日課である犬の散歩に出かけた。数軒の店が建ち並ぶいつもの大駐車場沿いの道路を歩いていると、満月のような大きさのオレンジ色の物体が、道路の真っ正面の上空に幾つも浮いていた。周囲は確かに海に囲まれてはいるが、長年漁師をしてきた鎌田さんは、「あれは船の明りでも星の明りでもない、何かがおかしい」と、急ぎ店へ戻り、家庭用ビデオを持ち出して、元いた場所から撮影を開始した。

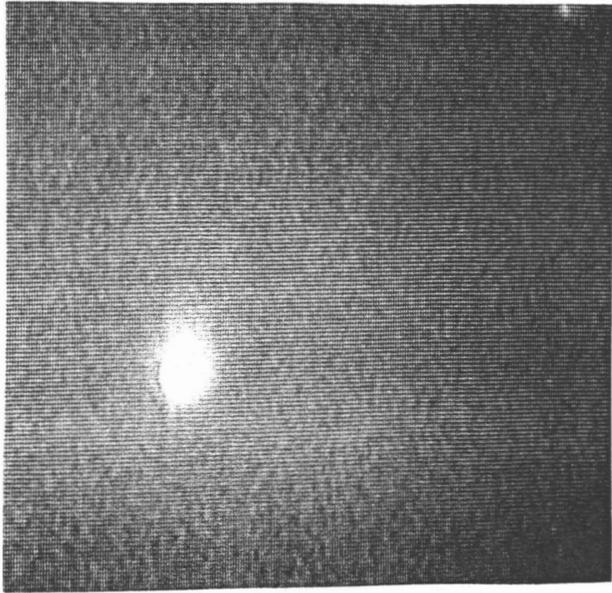


煙? が出ている

その時の映像が、左の写真(私がDVDからコンパクトカメラで写したもの)である。

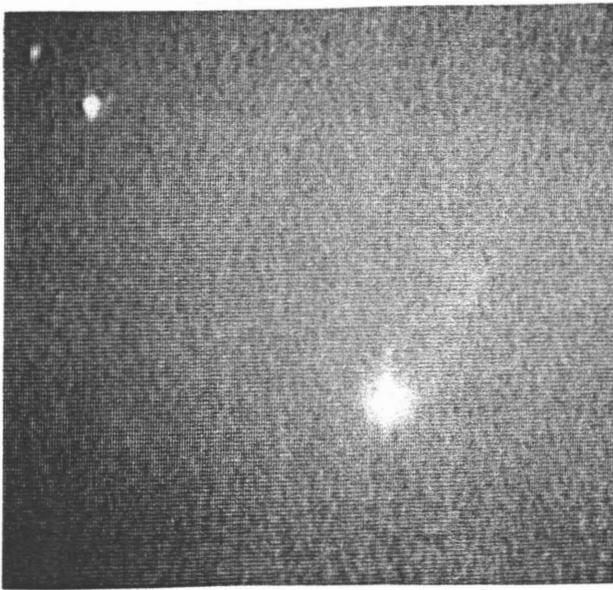
- ★目撃日時：2003.9.16 PM7:30～PM8:10頃迄
- ★場所：入道崎の道路上とそばの芝生
- ★目撃者：鎌田昭雄さん、散歩中の女性2名
- ★方角：南西～西
- ★距離：300メートル程(本人談)
- ★高さ：道路より50メートル程(本人談)

(※ 曖昧ですみません)



- ★色：オレンジ、赤
- ★形：球形
- ★動き：上下、回転、点滅、乱舞、ジグザグ
- ★音：全く無し
- ★臭い：全く無し
- ★見た目：脈動していて、生き物のよう（本人談）
- ★天気：満天の星空

←右上の点滅する飛行機？のような物体が、左へ飛んで行く（1981年放映の『11PM』の不知火映像に似ているなど、私・日下部は思った）。その間、音や臭いなどは一切無し。虫の音は聞こえる。

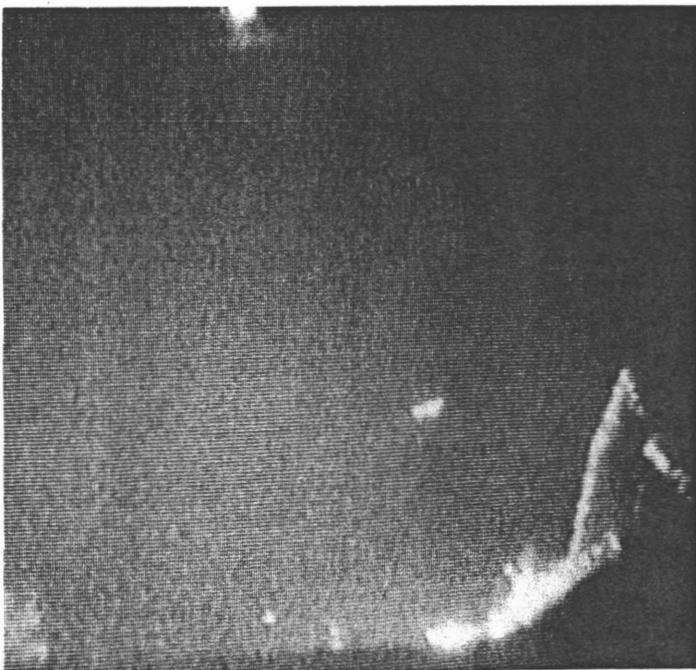


←やがて、左に行った点滅する物体から、何かが放たれる。真ん中の物体と同じ物体のようだ。その後、大きさも同じになる。

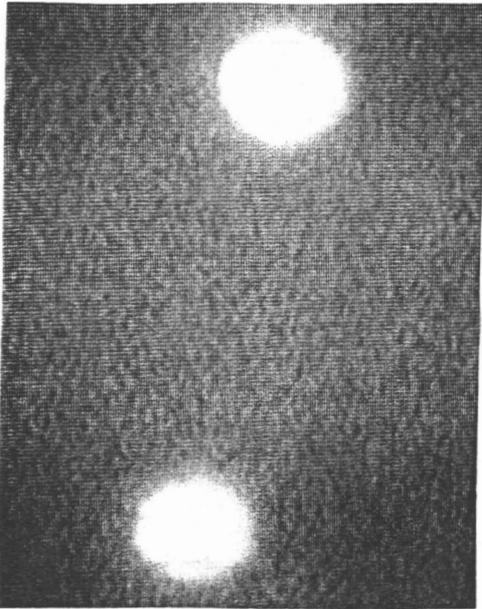
上で滞空している物体の下で、一見、虫にも見える幾つもの物体が縦横無尽に飛びかっている。ここは、道路そばの芝生とのことだが、辺り一面が火事にでもなったかと思ったほど、真っ赤な光に鎌田さん自身までもが包まれたと言う。この何かが飛び交っている空間も真っ赤になっていたらしいが、何故かビデオには映っていないとのこと。光に照らされたか包まれたか、とにかく強烈な光に見舞われた鎌田さん。自分も撮影しながら、火傷を負ったと感じたと言う。後で現場の芝生に行ってみたが、焼け焦げた形跡はなかったらしい。

それと、この右側の三角は一体何だろうと疑問にも思っていた。鎌田さんの証言では、「確かに近くに石は幾つがあるが、あそこにこんな尖った石は無い」とのこと。

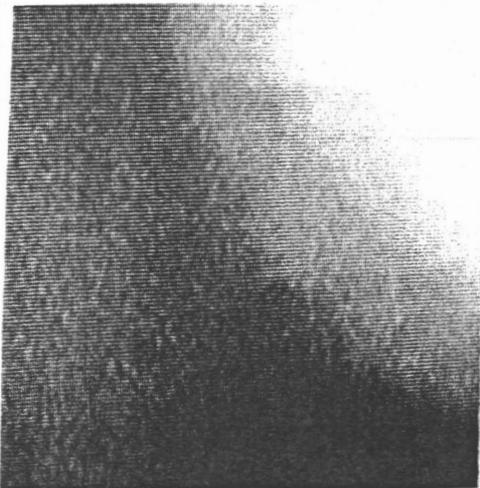
（確かに似たような石は幾つもあったが、まだ断定には至っていない）



滞空している2つの物体。真ん中辺りに横線？
↑物体の

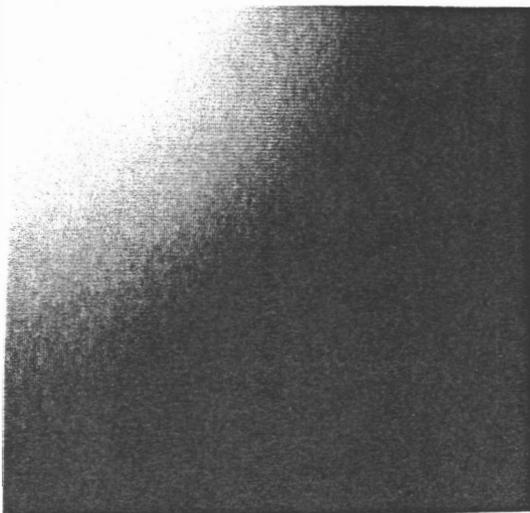


突然、真っ赤な光体が、ビデオカメラを意識するように急接近し、瞬時に右から左へ横切った。撮影されている中では、最大の大きさ。

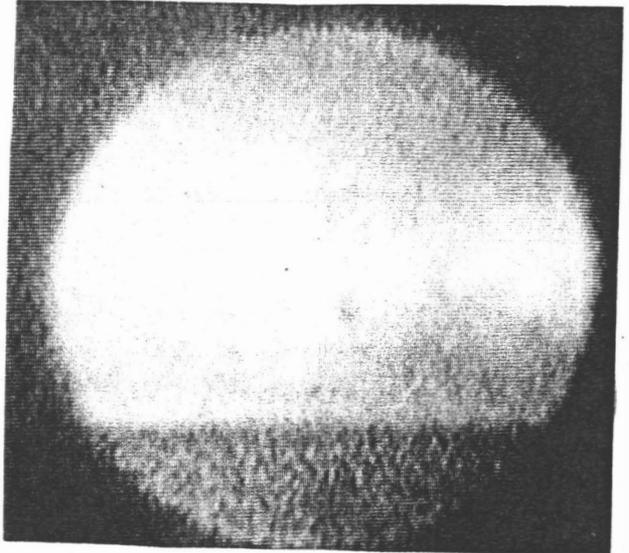


但し、カメラが切り替わったかのような間があり、一瞬なので、ピンボケや手ブレの可能性も…。

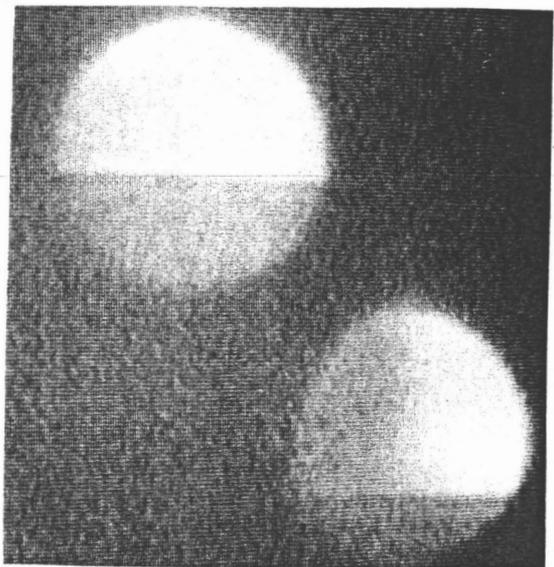
もしUFOであるならば、瞬時に急接近して、わざとビデオに撮らせた可能性もあり？



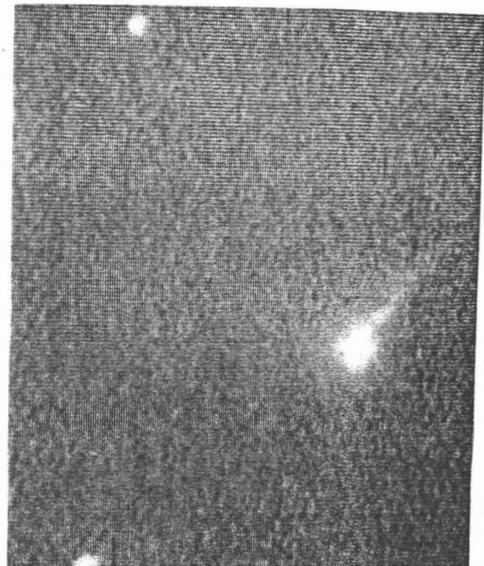
真ん中の丸い穴が気になる。カメラの性能でこう映るのか？ 下半分(横線?)は、海面が反射でもしているのだろうか？



中で何かが回転しているかのように見える。2つの距離が更に近い。ぼやけているのか？



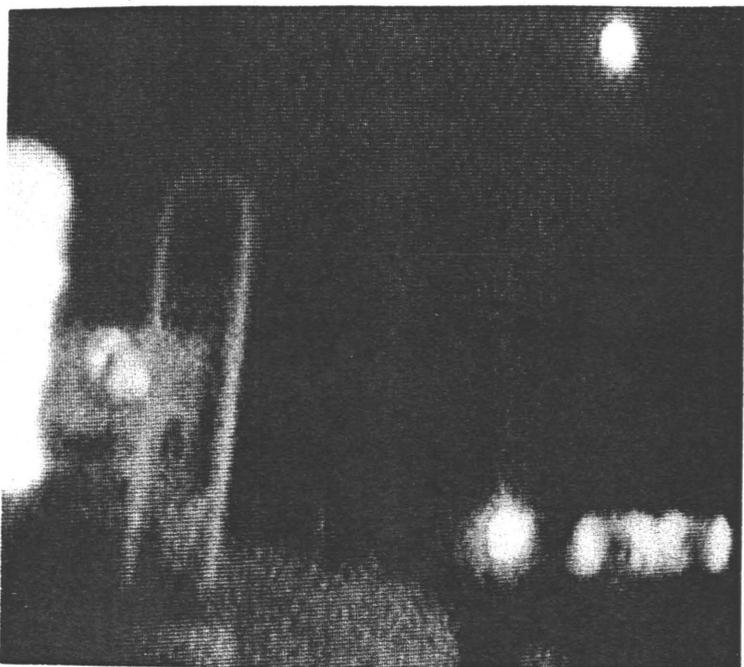
3つの物体。真ん中の物体からは煙？





↑トラック

3つの物体を撮影していると、車の音がして、画面に軽トラックが走っていくのが映り込む。鎌田さんが後に、ナンバープレートを頼りに持ち主を調べたら、男鹿市の菅原クリーニングの息子さんと判明。この車には、息子さんともう一人が乗るらしいが、もう一人の方はその日乗っていないと言い、息子さんの方は、確かに乗ったがその夜は、入道崎に行っていないと言う。但し、日中、なまはげラインを走行中に、UFOらしき物を見たとのこと。鎌田さんと息子さんは、はめ込まれた映像を見させられているようだと言いつつ、何か操作されている感じがすると言う。

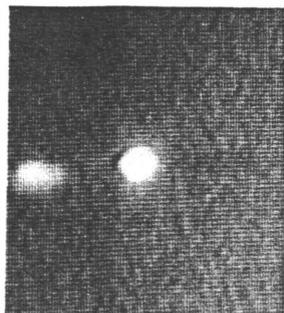


↑バス停

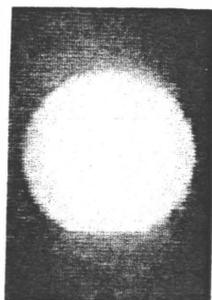
↑トラック

更にある夜、^(クリーニング)息子さんは、庭の杉の木の上に、炎のような物体が止まっているのを目撃した。今年10月に行われた男鹿での、矢追さんのセミナー参加者に配るDVDを大量にコピーしてくれた方だそうだが、本人は怖くてもうUFOに関わり合いたくないとか。

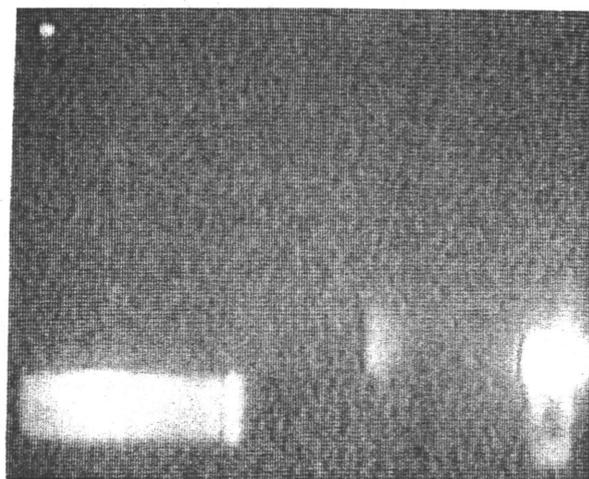
他にも、その日の夜(2003, 9/16)、近くの西黒沢地区に住むある方は、いつもは見えない月が部屋の窓から見えたので、「何でここに月があるんだ?」と不思議に思い、しばらく見ていると、突然それが横に動きだし、徐々に小さくなって消えたと言う。



船の明り。



その1つをアップ。



同じく船の明り。左上に点滅する物体。

【その後の鎌田さんの行動など】

■鎌田さんは、近くのレーダー基地にも問い合わせた。「変なのがその日飛んでいたが、何かレーダーに映っていないか？」と。すると、最初に電話に出た人が「少々お待ち下さい」と言い、老人に代わった。すると、「誰かに言いましたか？」と第一声が。その後に「訓練の見間違いですよ」と言われた。鎌田さんは、最初の第一声にひっかりと違和感を感じて仕方が無いと何度も言う。

■鎌田さんが電話を切った直後、戦闘機が物凄い音を立てて飛んできた。余りのタイミングの良さに、調査をしに来たが訓練があったとごまかしているかのようだったと鎌田さん。その戦闘機は2～3日やって来て、駐車場そばで海苔を売る女性が、余りにもうるさくて商売にならないと帰った。

■鎌田さんは、元・航空自衛隊だった友人に尋ねると、そういう物（未確認飛行物体）は、しょっちゅう見ていたが、上にそう報告はできないとのこと。聞かれても、訓練の照明弾などで説明するのが当たり前となっていると言う。

■観光協会と商工会にも、問い合わせた。すると、観光地の真ん前でそういう訓練が行われる際には、必ず観光協会などにも連絡が入るとのこと。しかし、ここ数年男鹿沖で、照明弾の訓練の連絡は入っていないとのことだった。

（連絡が行っていないだけなのだろうか？）

<2003年9月16日以外にも目撃された、同様のオレンジ色の光体の目撃情報>

★2004, 4/2 PM7:05～PM7:15…鎌田さん、奥さん、散歩中の人々。

★2004, 5/9 PM9:30～PM9:45…鎌田さん一家、秋田市の鎌田さん、東京の星野さん。

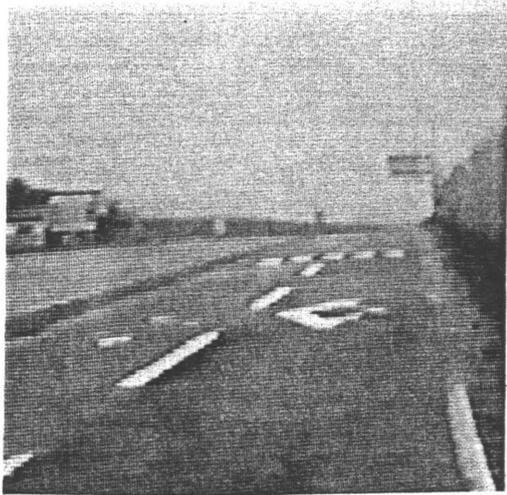
■映像を検証して戴こうと、誰に観て戴くか考え、東京の娘さんに頼んでネットで調べてもらった結果、矢追さんがいいんじゃないかとのことで、ビデオを送った。それをきっかけに、撮影当初より鎌田さんが考えていたUFOを観光に結び付けられないかと、まずはその第一歩であるUFOセミナーを、男鹿市観光協会主催・商工会共催の下、2006, 10.8 に矢追氏を招いて開催された。

鎌田さんは、羽咋市や飯野町のようなUFO施設を造れたらいいなとも、出会った当初から話していた。男鹿市を、UFOで新たな観光の拠点として活性化させたいと言う。しかし、鎌田さん自身が気さくで明るい性格なので、人も引きつけるのか次々情報が鎌田さんの元へ集ってくるので、既にみさき会館がUFO会館になっているようでもあった。店の外には7万円程したというUFOの絵の入った看板を3つ、店内にも、鎌田さん直筆の当時の様子などを描いた絵などがあちこちに貼られてある。映像を観たい人には、誰にでも無料で解説付きで観させてくれる。でも、このように一見、客寄せとして利用しているだけのように見受けられるが、昔から未知なる物に興味があったとのこと。近くの貝塚のあった山から、矢じりのような物も、昔、拾ってきたりしていたとのこと。それから、その山の方で10年程前、大きな母船のような巨大UFOが浮いている夢を見て、呼ばれている感じがしたが、鎌田さんは嫌だ嫌だと怖がっていたら、目が覚めたと言う。

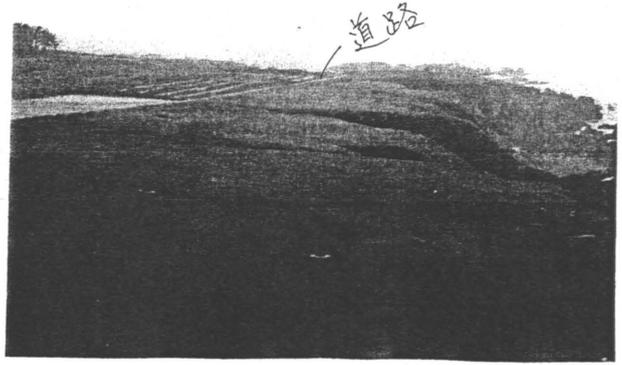
鎌田さんは、UFOの本などを調べていく内に、遺跡や歴史を知るきっかけにもなれたと言っている。ただUFO関連では、「広大で未知なる分野のことだから、考え方も意見も広く、皆バラバラだな」と明るく笑っていた。

<その他> 男鹿には、なまはげや徐福、5鬼が5色のコウモリになって飛んで来た伝説も有り。

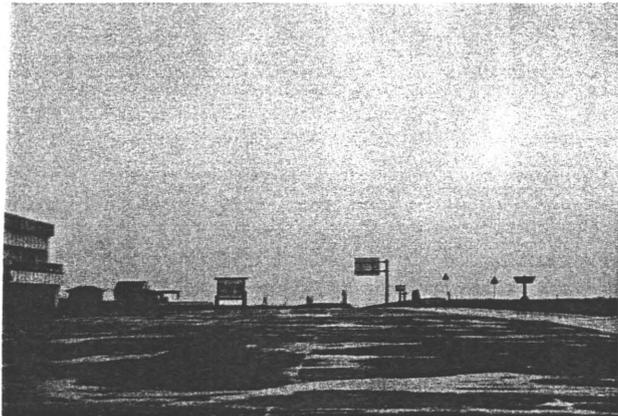
〜(赤木神申社縁起)



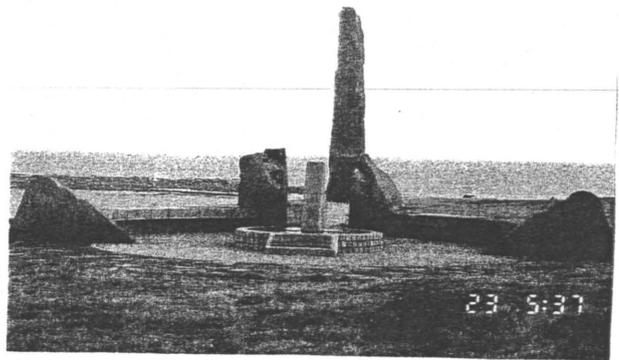
目撃
撮影現場
↙ ↘



まるでイギリスの様...



外の看板の一つ
↙



北緯40°ラインのモニュメント



鎌田 昭彦 氏



17型 UFO!?





↑ こんな感じだったとか... (電球)

↑ DVDで説明する金兼田さん



↑ 矢追さん



← 秋田で撮影されたのだよ →



UFO目撃情報 男鹿は多い!?

UFOを使った町おこしを旨とする「入道崎 UFO セミナー」が、十月八日午後一時から男鹿市北浦で開かれる。市商工会、市観光協会などからなる実行委員会の主催。UFO 研究者の矢追純一さん（東京都）をゲストに迎え、一年前に同市で撮影されたビデオの試写や映像の検証を行う。

来月8日 入道崎セミナー 映像を検証

さんとともに映像を検証する。同四時から矢追さんを囲む交流会を開く。参加費は千円（交流会参加の場合は三千五百円。定員は五十人で先着順。宿泊も可。全員に鎌田さん撮影のDVDがプレゼントされる。問い合わせは男鹿市観光協会 0185・24・4700

Oの目撃情報が多いことで知られる。UFOを地域おこしにつなげられないかと考えた」と話す。

当日は午後一時からセイコーランドホテルで UFO セミナーを開催。同時からは入道崎のビデオ撮影現場に行き、矢追

『その他の男鹿周辺のUFO目撃』

●秋田市の白戸啓蔵さん（現65才）

日時：1976, 12. 10頃 AM0:30～AM0:38

場所：秋田県八郎潟町三倉鼻の

国道7号線沿いの田んぼ

目撃者：2名（白戸さんと同乗者）

方角：西→南に飛んで行った

仰角：田んぼにいたのが垂直に上がる（90度）

色：オレンジ、高速で動くと青白い

形：帽子型（アダムスキー型）

大きさ：10メートルほど（本人談）

距離：数メートルも離れていない（本人談）

（※ またもや曖昧ですみません）

秋田市から北の能代方面に車を走らせていると、左側（西）の田んぼの方で、オレンジ色に発光するUFOが停止していた。大きさは約10メートル位に見えた。車が近付いたら、UFOが急に垂直に上昇し、スピードを上げ、ジグザグ運動をしながら車の真上に来た時、2人は余りの怖さに車から降りて、車の下に隠れてUFOが去って行くまで見ていた。

●古谷之彦さん（現42才） 韮根の杜さんの野なまはげ太鼓メンバー

日時：2006, 11. 3 PM9:00～AM2:00

場所：男鹿オートキャンプ場

目撃者：14名（なまはげ太鼓メンバー）

方角：南東

仰角：60度

色：色々な色に見えたとのこと

形：球形

大きさ：5円玉の穴の1/3

16名で食事や酒を飲んでいる最中に、UFOらしき物体が上空に現われ、双眼鏡を車につけていた古谷さんは、それを持ち出し皆にも見せたが、2名が帰ったので14名が目撃。中には酔っている人もいたが、物体は、同じ場所を左右にジグザグに動き、最初は大きかったのが段々小さくなったとのこと。

●東京都文京区の新川昇くん（当時13才）

昭和48年8月、夏休み男鹿半島の親戚の家で過ごしていた。海を眺めていたら、突然前方の上空に、異様な物体が飛んでいるのを見て、空飛ぶ円盤だと思ったと言う。およそ100 M（この証言）。黒っぽく丸い物体。カメラをぶら下げていた。父親が勤める毎日新聞に載った。

●秋田市の鎌田さん（女性）

男鹿半島の日本海側、桜島付近の県道を車で日中走らせていると、^(西)銀色の円盤が車に向かって飛んできた。

●商工会の西山（村）?さん（女性）

寒風山の上でUFOをよく見ているとのこと。玄関の前にもUFO（の光?）が降りてきた。

●板前の有馬（間?）さん（男性）

昔から、一ノ目潟（丸ヶ淵）でブラックバスを釣りに行くと、台形や円形や楕円など様々な形のUFOが湖の上空に浮いているのを目撃。

- 小さい頃、十二湖桜公園で、野良猫に餌をやっていると、上空にUFOがとまっていた。
- 入道崎方面に繋がる県道121号線の草地で、ミステリーサークルのような円があるのを見た。
- 他には、「男鹿では、UFOを見ない人の方が少ないんじゃないか?」という一言が印象的だった。

●Kさん（女性）2004, 12. 10 PM7:00～7:15、男鹿市の自宅の庭から、綺麗な星空を見ていたら、ピカピカ輝くヒレのような物がゆつくりと東から南の方へ動き出した。色：オレンジ、形：帽子型、仰角：45度、大きさ：5円玉の穴の1/3、目撃者：1名（Kさん）。

男鹿市観光ア

～男鹿市総合観光
パンフレットより～

入道崎 日本の灯台50出入道崎灯台 (平成19年度選定)
入道崎灯台資料展示室
夕陽のコンサートin入道崎
海底透視船乗場

北緯40°線

八望台交差点

男鹿温泉

湯本

男鹿温泉郷

男鹿温泉郷

北浦

八望台

戸賀湾

男鹿山温泉

男鹿水族館 GAO

金ヶ崎温泉 (源泉のみ)

なまはげ 柴灯まつり
2月第2金・土・日曜日

桜島

アオサギ群生地

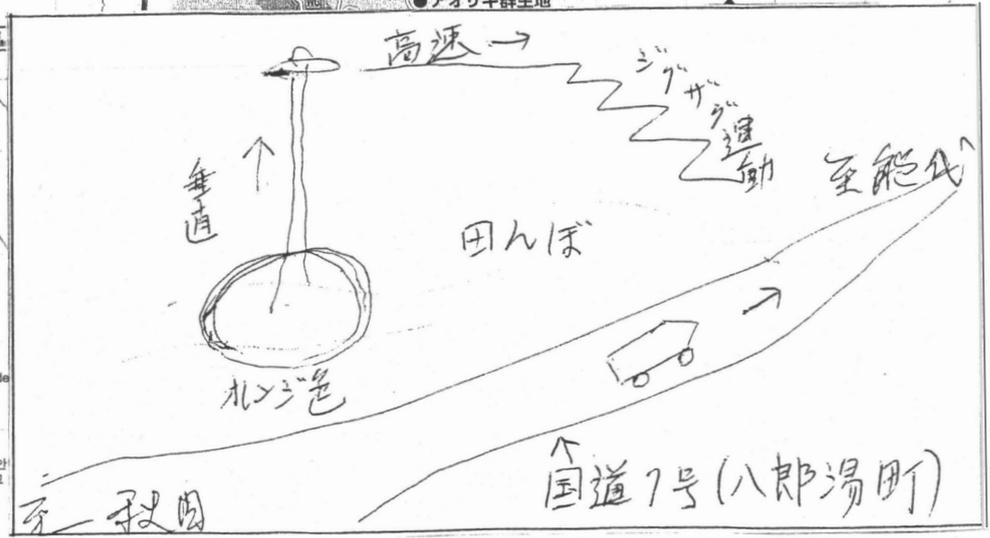
日本の夕陽100選 男鹿市 (平成11年度選定)



アクセスマップの見方
本文中の(11111A-1)で表記されている番号は、
MAP上部の数字と
左側のアルファベットが交差する位置で表示して
あります。

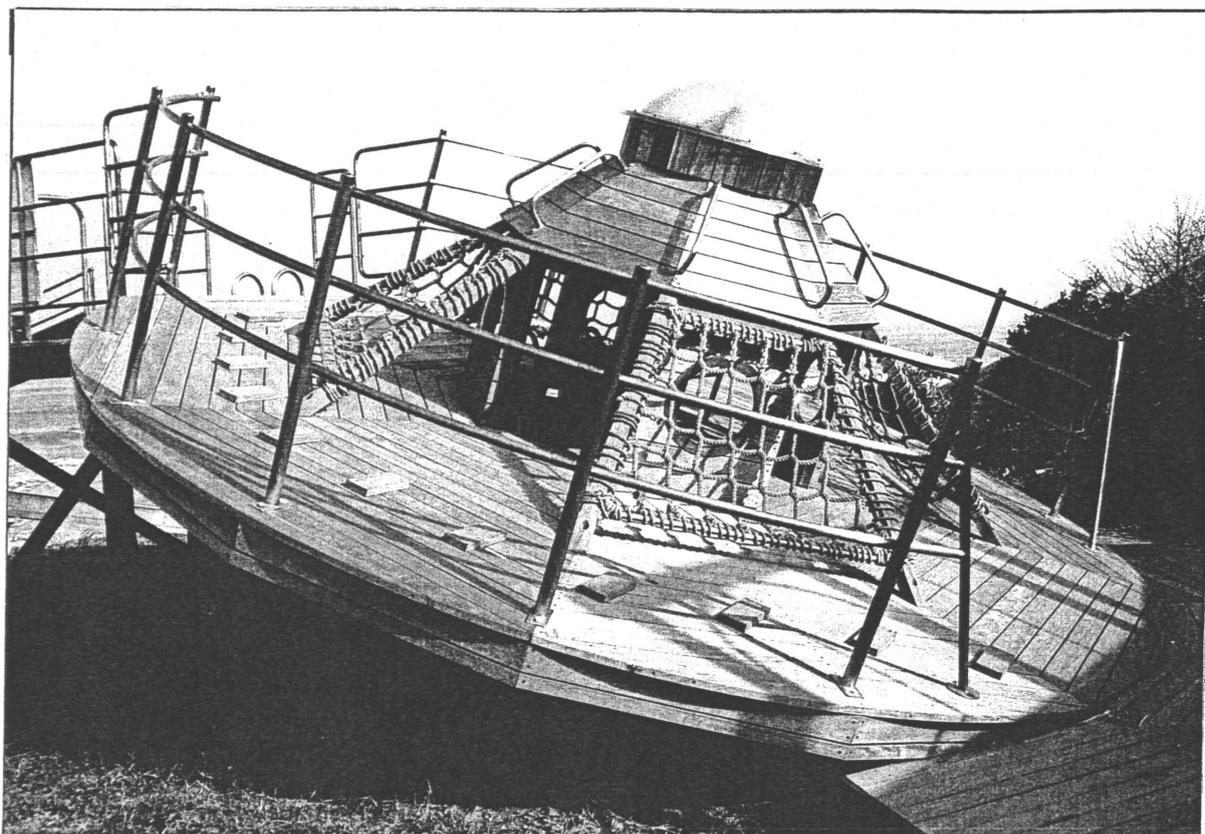
Legend
Map coordinates, e.g. (11111A-1), refer to the gridded
left and the numbers at the top of the map.

교통안내도 보는 방법
본문중에 (11111A-1) 으로 표기되어 있는 번호를 안
숫자와 왼쪽의 알파벳이 교차하는 위치를 표시하고



1976.12.10頃秋田市の白戸啓蔵さんが目撃した目撃図より。

あの“虚舟”が、遊具として海浜公園に出現!



200年前のうつろ舟現る?

ふじたいら

筆者は2006年後期、船橋西図書館所蔵の虚舟瓦版を見る機会に恵まれた事から、その謎の解明に挑んだ。

虚舟（うつろぶね）とは、中が空洞になっている船の事である。

時は江戸時代後期、享和3年（1803）、小笠原越中守（他に小笠原和泉公と書かれた随筆有り）の知行地常陸国（今の茨城県）かしま郡京舎ヶ濱（他にはらやどりはま・原舎浜・阿久津浦と書かれた随筆有り）に不思議な形をした船、虚舟が漂着した。船の中には眉や髪が赤黒く、青白い肌をした若く美しい女性が一人乗っていた。その女性は言葉が通じず、白木の箱を大事に抱え、人を近づけなかった。そして、声は甲高く大音であった。

船の大きさは幅約5m40cm、高さ約3m30cm。鉄製で窓はガラスや水晶で出来ていた。とこんな話が不思議な図入りで当時の瓦版や幾つかの随筆集に残っている。この約200年前の虚舟漂着事件はその内容から、もしかしたら「江戸時代のUFO遭遇事件」ではと、日本のUFO研究者の間では知らない人がいない程有名な話である。

筆者は手掛かりとなる浜の名や小笠原氏の知行地について、書物による記録や漂着事件とほぼ同時期に作成された伊能忠敬の東関東大図を調べた。しかし、一致する地名や小笠原姓の知行地は無かった。これにより、漂着現場は特定する事はもはや不可能とな

り、事件そのものが怪しく思えた。しかし、ここで虚舟事件は噂から来る作り話の類だと片付けてしまうのは簡単だが、それでいいのだろうか・・・。

1803年の瓦版から随筆「梅の塵」(1830~1844)まで約40年に渡って書き継がれてきたというのは理由がある筈である。いや、よく考えてみれば、現在でも各UFO本やオカルト書籍に顔を出すという事は200年以上の歴史があるという事だ。

私は、その理由を虚舟の絵や解説不能の文字にあると考えている。文字については専門家ではないので触れずにおくが、虚舟の絵の方は空飛ぶ円盤やUFOとして説明しても違和感を覚えない物だ。そのUFO的形体は人間の興味を引き、人間の潜在的なものを刺激する力があるのかもしれない。この絵が無かったら21世紀の現代まで語り継がれてきたらどうか・・・大いに疑問である。参考として筆者が随筆を見て描いた虚舟のイラストを添付するので見て頂ければと思う。

さて、そんな虚舟が紙の世界にとどまらず、三次元の形としても現代に現れたので紹介したい。2005年7月にオープンした茨城県の鹿島灘海浜公園には、**うつろ舟をモデル**にした遊具(すべり台)が制作された。設置場所も古文書の世界を再現するような鹿島灘の砂浜上だ。UFO的伝承がこのような形で表現されるとは誰が想像したであろう。潮騒に雑じり、200年前の絵師たちのひそひそ話が聞こえてくるようである。

◆◆◆鹿島灘海浜公園◆◆◆

茨城県銚田市大竹地内

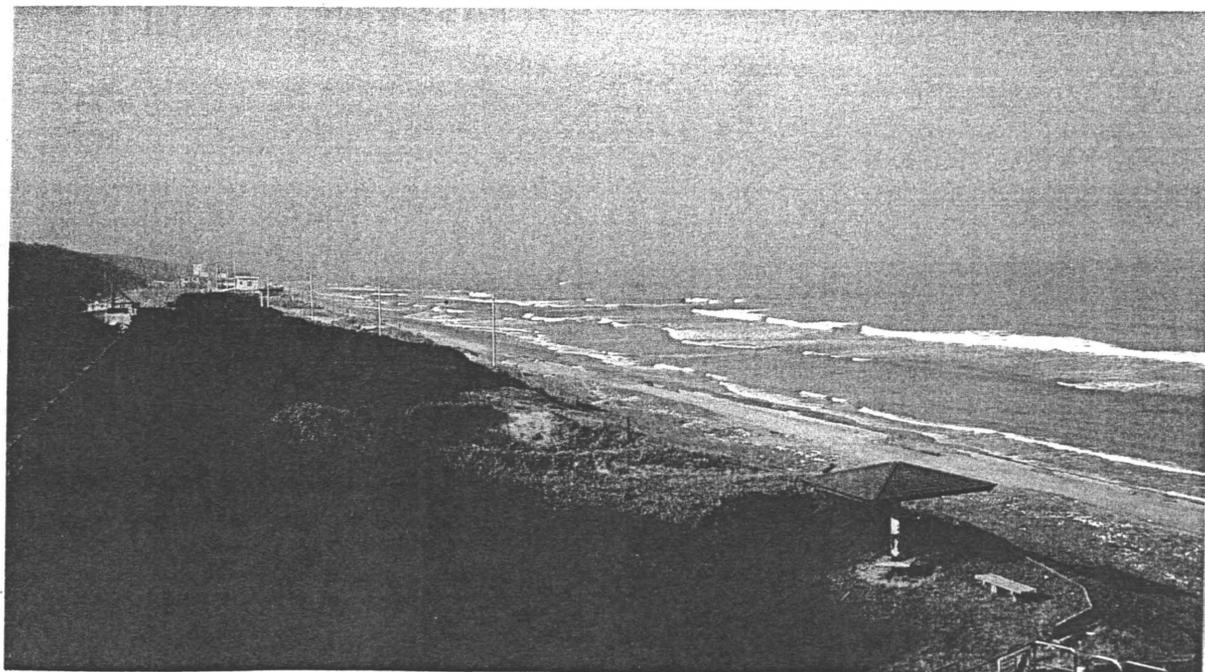
全体面積 27ha 海浜部 12ha

主な施設

- 入口広場・ボードウォーク 1000・ピクニック広場
- 展望デッキ・遊具(うつろ舟)・林内散策路・足つぼ舗装
- 管理研修・休憩・トイレ・ちびっこランド

●お問い合わせ先

茨城県 土木部 都市局 公園街路課
〒310-8555 水戸市笠原町978番6 TEL.029-301-4655
茨城県 銚田市 土木事務所 道路河川整備第一課
〒311-1504 茨城県銚田市安原1414 TEL.0291-33-6481
銚田市役所
〒311-1607 茨城県銚田市銚田1444 TEL.0901-73-9111



うつつぼ船奇談



真相を探れ!

ひたちなかの渡辺さんら

漂着ミステリーは事件!

瓦版発見、解明に期待

【本紙】「うつつぼ船奇談」の真相を探るべく、ひたちなか市在住の渡辺さんらが発見した瓦版が、謎の真相を解明する手がかりになると見られる。この瓦版は、江戸時代末期の浮世草子「うつつぼ船奇談」の一場面を描いたもので、船の構造や内部の配置が詳細に描かれている。発見された瓦版は、船の内部に設置されたと思われる格子状の構造や、船の外部の装飾が特徴的である。この瓦版の発見は、これまで謎に包まれていた「うつつぼ船奇談」の真相を解明する上で重要な手がかりとなると期待されている。

【本紙】「うつつぼ船奇談」の真相を探るべく、ひたちなか市在住の渡辺さんらが発見した瓦版が、謎の真相を解明する手がかりになると見られる。この瓦版は、江戸時代末期の浮世草子「うつつぼ船奇談」の一場面を描いたもので、船の構造や内部の配置が詳細に描かれている。発見された瓦版は、船の内部に設置されたと思われる格子状の構造や、船の外部の装飾が特徴的である。この瓦版の発見は、これまで謎に包まれていた「うつつぼ船奇談」の真相を解明する上で重要な手がかりとなると期待されている。

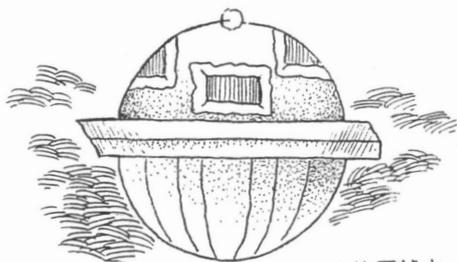
【本紙】「うつつぼ船奇談」の真相を探るべく、ひたちなか市在住の渡辺さんらが発見した瓦版が、謎の真相を解明する手がかりになると見られる。この瓦版は、江戸時代末期の浮世草子「うつつぼ船奇談」の一場面を描いたもので、船の構造や内部の配置が詳細に描かれている。発見された瓦版は、船の内部に設置されたと思われる格子状の構造や、船の外部の装飾が特徴的である。この瓦版の発見は、これまで謎に包まれていた「うつつぼ船奇談」の真相を解明する上で重要な手がかりとなると期待されている。

【本紙】「うつつぼ船奇談」の真相を探るべく、ひたちなか市在住の渡辺さんらが発見した瓦版が、謎の真相を解明する手がかりになると見られる。この瓦版は、江戸時代末期の浮世草子「うつつぼ船奇談」の一場面を描いたもので、船の構造や内部の配置が詳細に描かれている。発見された瓦版は、船の内部に設置されたと思われる格子状の構造や、船の外部の装飾が特徴的である。この瓦版の発見は、これまで謎に包まれていた「うつつぼ船奇談」の真相を解明する上で重要な手がかりとなると期待されている。

【本紙】「うつつぼ船奇談」の真相を探るべく、ひたちなか市在住の渡辺さんらが発見した瓦版が、謎の真相を解明する手がかりになると見られる。この瓦版は、江戸時代末期の浮世草子「うつつぼ船奇談」の一場面を描いたもので、船の構造や内部の配置が詳細に描かれている。発見された瓦版は、船の内部に設置されたと思われる格子状の構造や、船の外部の装飾が特徴的である。この瓦版の発見は、これまで謎に包まれていた「うつつぼ船奇談」の真相を解明する上で重要な手がかりとなると期待されている。

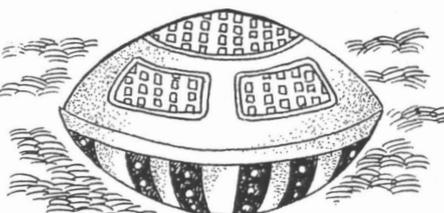
瓦版を元にしたと思われる虚舟と各地行地

「鶯宿日記」(1815)



小笠原越中守の知行地
常陸国鹿嶋郡阿久津浦

「兎園小説」(1825)



小笠原越中守の知行地
常陸国はらやどりの浜

「梅の塵」(1830~1844)



小笠原和泉公の領地
常陸の国原舎浜(はらとはま)

舞台の浜、特定まず必要

■学研発行の雑誌『ムー』二〇〇七年一月号にふじたいら氏によるレポートが掲載されています。

学研発行の雑誌『ムー』二〇〇七年一月号にふじたいら氏によるレポートが掲載されています。

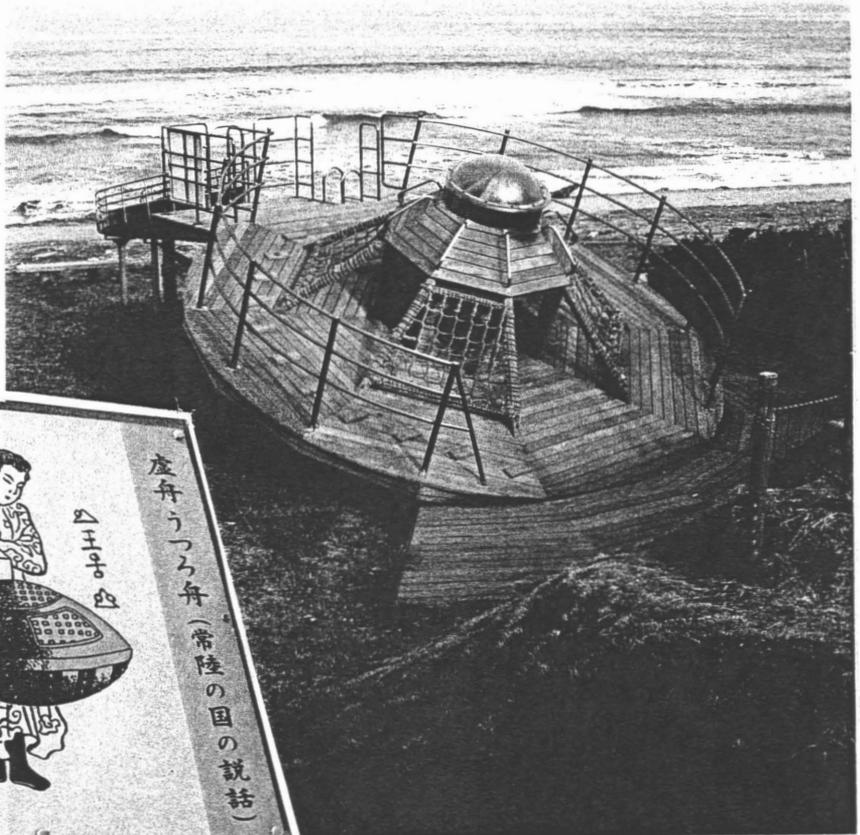
最新JMA選定事件
現代の10人が占断! 大予想2007
月報に大活躍! 占断の達人
中国ドラマッドとオリオン三ツ星
高次元人モンスター

発見!!
古代アママン文

690円



■1998年「第1回UFOフォーラム」で。
向かって左が筆者のふじたいら氏。
となりは編者。



つから、約2百年前(享和3年(1803年)富原の国(今の茨城県)、はらやどりの宮に不思議な舟の種なものが出現して、出の者たちが、小舟を出し、浜に引き寄せました。中には異様な風情をした女の人かたつた。一人で乗り片時も小さな箱を離しませんでした。女の方は、眉も髪のもも赤く、眼は横色、髪は付け毛をつけているように長く存に垂れていました。舟は、丸く長さが約5メートルで、上部はガラスで庇もり、底も円形で鉄の板金が張ってあり、中には、間違できない文字が書かれていました。どこの国の人かと言葉は通じず、困惑する人を見つめ、ただのどかな微笑を浮かべておりました。浜の人達は、相談した結果、その筋へ泳えたり面倒であるので沖へ押出しました。そして、その奇怪な舟はふたたび海の果てへ流れてしまいました。

この話の舟は、今日のUFOが潜水艇の類と考えられます。SF的には、未来人の乗ったタイムマシンや別の次元の人かも知れません。この茨城県の海岸にはそんな不思議な出来事もありました。

座舟うつら舟(常陸の国の説話)

神ノ舟
も何ぞも
モノナリ
大箱(長野地方)

鹿島灘海浜公園の概要

- テーマ ● 海浜部 - 「海 その自然と人をつ結ぶ」
● 台地部 - 「地域の町へ開き、地域と人・人と人をつ結ぶ」

鹿島灘海浜公園は茨城県の海岸線(鹿島灘約120km)のほぼ中央に位置し、豊かな海浜自然環境を活かし、鹿行地域の健康運動、レクリエーション活動の拠点、リクゼーションの場として利用されるよう整備してまいります。

1 足つほ道橋

2 ボードウォーク1000(北)

3 ピクニック広場

4 遊具(うつら舟)

5 ちびっこランド

6 四季の花回廊

7 主要建築施設(管理研修・休憩・トイレ)

8 オアションビューギャラリー

9 ボードウォーク1000(南)

10 オアションビューギャラリー

11 林内散策路(海気浴ルート)

12 花の回廊

13 主要建築施設(管理研修・休憩・トイレ)

14 多目的広場

15 四季の花回廊

16 展示場

17 展示場

18 展示場

19 展示場

20 展示場

21 展示場

22 展示場

23 展示場

24 展示場

25 展示場

26 展示場

27 展示場

28 展示場

29 展示場

30 展示場

31 展示場

32 展示場

33 展示場

34 展示場

35 展示場

36 展示場

37 展示場

38 展示場

39 展示場

40 展示場

41 展示場

42 展示場

43 展示場

44 展示場

45 展示場

46 展示場

47 展示場

48 展示場

49 展示場

50 展示場

51 展示場

52 展示場

53 展示場

54 展示場

55 展示場

56 展示場

57 展示場

58 展示場

59 展示場

60 展示場

61 展示場

62 展示場

63 展示場

64 展示場

65 展示場

66 展示場

67 展示場

68 展示場

69 展示場

70 展示場

71 展示場

72 展示場

73 展示場

74 展示場

75 展示場

76 展示場

77 展示場

78 展示場

79 展示場

80 展示場

81 展示場

82 展示場

83 展示場

84 展示場

85 展示場

86 展示場

87 展示場

88 展示場

89 展示場

90 展示場

91 展示場

92 展示場

93 展示場

94 展示場

95 展示場

96 展示場

97 展示場

98 展示場

99 展示場

100 展示場

101 展示場

102 展示場

103 展示場

104 展示場

105 展示場

106 展示場

107 展示場

108 展示場

109 展示場

110 展示場

111 展示場

112 展示場

113 展示場

114 展示場

115 展示場

116 展示場

117 展示場

118 展示場

119 展示場

120 展示場

121 展示場

122 展示場

123 展示場

124 展示場

125 展示場

126 展示場

127 展示場

128 展示場

129 展示場

130 展示場

131 展示場

132 展示場

133 展示場

134 展示場

135 展示場

136 展示場

137 展示場

138 展示場

139 展示場

140 展示場

141 展示場

142 展示場

143 展示場

144 展示場

145 展示場

146 展示場

147 展示場

148 展示場

149 展示場

150 展示場

151 展示場

152 展示場

153 展示場

154 展示場

155 展示場

156 展示場

157 展示場

158 展示場

159 展示場

160 展示場

161 展示場

162 展示場

163 展示場

164 展示場

165 展示場

166 展示場

167 展示場

168 展示場

169 展示場

170 展示場

171 展示場

172 展示場

173 展示場

174 展示場

175 展示場

176 展示場

177 展示場

178 展示場

179 展示場

180 展示場

181 展示場

182 展示場

183 展示場

184 展示場

185 展示場

186 展示場

187 展示場

188 展示場

189 展示場

190 展示場

191 展示場

192 展示場

193 展示場

194 展示場

195 展示場

196 展示場

197 展示場

198 展示場

199 展示場

200 展示場

201 展示場

202 展示場

203 展示場

204 展示場

205 展示場

206 展示場

207 展示場

208 展示場

209 展示場

210 展示場

211 展示場

212 展示場

213 展示場

214 展示場

215 展示場

216 展示場

217 展示場

218 展示場

219 展示場

220 展示場

221 展示場

222 展示場

223 展示場

224 展示場

225 展示場

226 展示場

227 展示場

228 展示場

229 展示場

230 展示場

231 展示場

232 展示場

233 展示場

234 展示場

235 展示場

236 展示場

237 展示場

238 展示場

239 展示場

240 展示場

241 展示場

242 展示場

243 展示場

244 展示場

245 展示場

246 展示場

247 展示場

248 展示場

249 展示場

250 展示場

251 展示場

252 展示場

253 展示場

254 展示場

255 展示場

256 展示場

257 展示場

258 展示場

259 展示場

260 展示場

261 展示場

262 展示場

263 展示場

264 展示場

265 展示場

266 展示場

267 展示場

268 展示場

269 展示場

270 展示場

271 展示場

272 展示場

273 展示場

274 展示場

275 展示場

276 展示場

277 展示場

278 展示場

279 展示場

280 展示場

281 展示場

282 展示場

283 展示場

284 展示場

285 展示場

286 展示場

287 展示場

288 展示場

289 展示場

290 展示場

291 展示場

292 展示場

293 展示場

294 展示場

295 展示場

296 展示場

297 展示場

298 展示場

299 展示場

300 展示場

301 展示場

302 展示場

303 展示場

304 展示場

305 展示場

306 展示場

307 展示場

308 展示場

309 展示場

310 展示場

311 展示場

312 展示場

313 展示場

314 展示場

315 展示場

316 展示場

317 展示場

318 展示場

319 展示場

320 展示場

321 展示場

322 展示場

323 展示場

324 展示場

325 展示場

326 展示場

327 展示場

328 展示場

329 展示場

330 展示場

331 展示場

332 展示場

333 展示場

334 展示場

335 展示場

336 展示場

337 展示場

338 展示場

339 展示場

340 展示場

341 展示場

342 展示場

343 展示場

344 展示場

345 展示場

346 展示場

347 展示場

348 展示場

349 展示場

350 展示場

351 展示場

352 展示場

353 展示場

354 展示場

355 展示場

356 展示場

357 展示場

358 展示場

359 展示場

360 展示場

361 展示場

362 展示場

363 展示場

364 展示場

365 展示場

366 展示場

367 展示場

368 展示場

369 展示場

370 展示場

371 展示場

372 展示場

373 展示場

374 展示場

375 展示場

376 展示場

377 展示場

378 展示場

379 展示場

380 展示場

381 展示場

382 展示場

383 展示場

384 展示場

385 展示場

386 展示場

387 展示場

388 展示場

389 展示場

390 展示場

391 展示場

392 展示場

393 展示場

394 展示場

395 展示場

396 展示場

397 展示場

398 展示場

399 展示場

400 展示場

401 展示場

402 展示場

403 展示場

404 展示場

405 展示場

406 展示場

407 展示場

408 展示場

409 展示場

410 展示場

411 展示場

412 展示場

413 展示場

414 展示場

415 展示場

416 展示場

417 展示場

418 展示場

419 展示場

420 展示場

421 展示場

422 展示場

423 展示場

424 展示場

425 展示場

426 展示場

427 展示場

428 展示場

429 展示場

430 展示場

431 展示場

432 展示場

433 展示場

434 展示場

435 展示場

436 展示場

437 展示場

438 展示場

439 展示場

440 展示場

441 展示場

442 展示場

443 展示場

444 展示場

445 展示場

446 展示場

447 展示場

448 展示場

449 展示場

450 展示場

451 展示場

452 展示場

453 展示場

454 展示場

455 展示場

456 展示場

457 展示場

458 展示場

459 展示場

460 展示場

461 展示場

462 展示場

463 展示場

464 展示場

465 展示場

466 展示場

467 展示場

468 展示場

469 展示場

470 展示場

471 展示場

472 展示場

473 展示場

474 展示場

475 展示場

476 展示場

477 展示場

478 展示場

479 展示場

480 展示場

481 展示場

482 展示場

483 展示場

484 展示場

485 展示場

486 展示場

487 展示場

488 展示場

489 展示場

490 展示場

491 展示場

492 展示場

493 展示場

494 展示場

495 展示場

496 展示場

497 展示場

498 展示場

499 展示場

500 展示場

501 展示場

502 展示場

503 展示場

504 展示場

505 展示場

506 展示場

507 展示場

508 展示場

509 展示場

510 展示場

511 展示場

512 展示場

513 展示場

514 展示場

515 展示場

516 展示場

517 展示場

518 展示場

519 展示場

520 展示場

521 展示場

522 展示場

523 展示場

524 展示場

525 展示場

526 展示場

527 展示場

528 展示場

529 展示場

530 展示場

531 展示場

532 展示場

533 展示場

534 展示場

535 展示場

536 展示場

537 展示場

538 展示場

539 展示場

540 展示場

541 展示場

542 展示場

543 展示場

544 展示場

545 展示場

546 展示場

547 展示場

548 展示場

549 展示場

550 展示場

551 展示場

552 展示場

553 展示場

554 展示場

555 展示場

556 展示場

557 展示場

558 展示場

559 展示場

560 展示場

561 展示場

562 展示場

563 展示場

564 展示場

565 展示場

566 展示場

567 展示場

568 展示場

569 展示場

570 展示場

571 展示場

572 展示場

573 展示場

574 展示場

575 展示場

576 展示場

577 展示場

578 展示場

579 展示場

580 展示場

581 展示場

582 展示場

583 展示場

584 展示場

585 展示場

586 展示場

587 展示場

588 展示場

589 展示場

590 展示場

591 展示場

592 展示場

593 展示場

594 展示場

595 展示場

596 展示場

597 展示場

598 展示場

599 展示場

600 展示場

601 展示場

602 展示場

603 展示場

604 展示場

605 展示場

606 展示場

607 展示場

608 展示場

609 展示場

610 展示場

611 展示場

612 展示場

613 展示場

614 展示場

615 展示場

616 展示場

617 展示場

618 展示場

619 展示場

620 展示場

621 展示場

622 展示場

623 展示場

624 展示場

625 展示場

626 展示場

627 展示場

628 展示場

629 展示場

630 展示場

631 展示場

632 展示場

633 展示場

634 展示場

635 展示場

636 展示場

637 展示場

638 展示場

639 展示場

640 展示場

641 展示場

642 展示場

643 展示場

644 展示場

645 展示場

646 展示場

647 展示場

648 展示場

649 展示場

650 展示場

651 展示場

652 展示場

653 展示場

654 展示場

655 展示場

656 展示場

657 展示場

658 展示場

659 展示場

660 展示場

661 展示場

662 展示場

663 展示場

664 展示場

665 展示場

666 展示場

667 展示場

668 展示場

669 展示場

670 展示場

671 展示場

672 展示場

673 展示場

674 展示場

675 展示場

676 展示場

677 展示場

678 展示場

679 展示場

680 展示場

681 展示場

682 展示場

683 展示場

684 展示場

685 展示場

686 展示場

687 展示場

688 展示場

689 展示場

690 展示場

691 展示場

692 展示場

693 展示場

694 展示場

695 展示場

696 展示場

697 展示場

698 展示場

699 展示場

700 展示場

701 展示場

702 展示場

703 展示場

704 展示場

705 展示場

706 展示場

707 展示場

708 展示場

709 展示場

710 展示場

711 展示場

712 展示場

713 展示場

714 展示場

715 展示場

716 展示場

717 展示場

718 展示場

719 展示場

720 展示場

721 展示場

722 展示場

723 展示場

724 展示場

725 展示場

726 展示場

727 展示場

728 展示場

729 展示場

730 展示場

731 展示場

732 展示場

733 展示場

734 展示場

735 展示場

736 展示場

737 展示場

738 展示場

739 展示場

740 展示場

741 展示場

742 展示場

743 展示場

744 展示場

745 展示場

746 展示場

747 展示場

748 展示場

749 展示場

750 展示場

751 展示場

752 展示場

753 展示場

754 展示場

755 展示場

756 展示場

757 展示場

758 展示場

759 展示場

760 展示場

761 展示場

762 展示場

763 展示場

764 展示場

765 展示場

766 展示場

767 展示場

768 展示場

769 展示場

770 展示場

771 展示場

772 展示場

773 展示場

774 展示場

775 展示場

776 展示場

777 展示場

778 展示場

779 展示場

780 展示場

781 展示場

782 展示場

783 展示場

784 展示場

785 展示場

786 展示場

787 展示場

788 展示場

789 展示場

790 展示場

791 展示場

792 展示場

793 展示場

794 展示場

795 展示場

796 展示場

797 展示場

798 展示場

799 展示場

800 展示場

801 展示場

802 展示場

803 展示場

804 展示場

805 展示場

806 展示場

807 展示場

808 展示場

809 展示場

810 展示場

811 展示場

812 展示場

813 展示場

814 展示場

815 展示場

816 展示場

817 展示場

818 展示場

819 展示場

820 展示場

821 展示場

822 展示場

823 展示場

824 展示場

825 展示場

826 展示場

827 展示場

828 展示場

829 展示場

830 展示場

831 展示場

832 展示場

833 展示場

834 展示場

835 展示場

836 展示場

837 展示場

838 展示場

839 展示場

840 展示場

841 展示場

842 展示場

843 展示場

844 展示場

845 展示場

846 展示場

847 展示場

848 展示場

849 展示場

850 展示場

851 展示場

852 展示場

853 展示場

854 展示場

855 展示場

856 展示場

857 展示場

858 展示場

859 展示場

860 展示場

861 展示場

862 展示場

863 展示場

864 展示場

865 展示場

866 展示場

867 展示場

868 展示場

869 展示場

870 展示場

871 展示場

872 展示場

873 展示場

874 展示場

875 展示場

876 展示場

877 展示場

878 展示場

879 展示場

880 展示場

881 展示場

882 展示場

883 展示場

884 展示場

885 展示場

886 展示場

887 展示場

888 展示場

889 展示場

890 展示場

891 展示場

892 展示場

893 展示場

894 展示場

895 展示場

896 展示場

897 展示場

898 展示場

899 展示場

900 展示場

901 展示場

902 展示場

903 展示場

904 展示場

905 展示場

906 展示場

907 展示場

908 展示場

909 展示場

910 展示場

911 展示場

912 展示場

913 展示場

914 展示場

915 展示場

916 展示場

917 展示場

918 展示場

919 展示場

920 展示場

921 展示場

922 展示場

923 展示場

924 展示場

925 展示場

926 展示場

927 展示場

928 展示場

929 展示場

930 展示場

931 展示場

932 展示場

933 展示場

934 展示場

935 展示場

936 展示場

937 展示場

938 展示場

939 展示場

940 展示場

941 展示場

942 展示場

943 展示場

944 展示場

945 展示場

946 展示場

947 展示場

948 展示場

949 展示場

950 展示場

951 展示場

952 展示場

953 展示場

954 展示場

955 展示場

956 展示

編者の掲示板書き込みより

■UFO活動の不均一さから垣間見る知性

UFO現代史をみると、UFOとは「不規則」で「選り好み」の激しい知性によってコントロールされていると思われるフシがあります。

特定の周期性を求めようとしても、宇宙船の特徴を得ようとしても、観測体制を強化して証拠を得ようとしても、統一的なUFO活動による成果は得られません。まったく無名の人に、露骨な現れかたをしたり、高名な政治家には金星と非難される現れかたをしたり、気球、風船、雲、鳥、ビニール袋、シャボン玉、それら既知のものに「似せた」あるいは「既知の物体と紛らわしい」現れかたをするため、絶えず肯定、否定の論争が生じます。

UFO現象を現出させる「知性」は、そうした見る者による「永遠の議論」を「促すために出現しているかのように思われます。「決してやつらに回答を与えてはならない」という永遠の誓約を誓ったメンバーによって現出されているようです。

そこに「個々の努力」という課題があります。つまり何もしないで「たなぼた」的に一生を過ごしても何も得られないで鬼畜の道を行くこともできれば、懸命に努力してUFO写真を枚撮る研究者の道を行くことも出来ます。

「いつか政府が公式に真実を発表してくれるだろう」と待ちの姿勢の人、「立派な科学者がきちんとしたことを教えてくれるに違いない」という期待、それらを裏切るために活動するのがUFOといえそうです。

映画の世界のように巨大な円盤が街の上空を飛行し、誰もが「やっぱり宇宙人はいんだ」と思うような出来事は、現代UFO史の「あいまいな出来事」の延長上では考えられません。今までの延長上でない状況、たとえば全世界核戦争、全世界大変動により、全人類の寿命が限定された場合、明確な現れかたが期待できるか、私はそのように考えています。

■妄想1「マンテルが生きて還ったら」

1948年1月7日「神・人」という奇妙な空軍基地近くで、それは起こりました。マンテルの追ったのは金星だ、という学者側、スカイブックで説明しようとした空軍担当官のルッペルト、生き証人トーマス・マンテル最後の通信は「お、お、何に人がいる」という内容だったそうです。もし、彼が生きて地上に降り立ち、記者会見で体験を述べたら、当局はそうはさせなかったでしょうね。

■妄想2「遭遇者の説明責任」

航空機飛行士、宇宙カプセル・宇宙機飛行士、彼らが遭遇した物体について、公の場で証言したら、そうはさせないでしょうね。しかし、その傾向に異を唱えてプロジェクトを進め、ついにはその機が生きた、と思ったら9.11で振り出しに戻りました。

■UFO目撃パイロットに殴られたルッペルト

これまで、会社の休憩時間に学術研究出版センター発行の「米下院UFOシンポジウム」未確認飛行物体の科学的研究第1巻「同第3巻」と読み、現在はUFO研究の名著ルッペルトの「未確認飛行物体に関する報告」を読んでいます。午前中の約10分、午後の約10分が私にとって至福の時です。

40年前は抄訳しか読んでなかったのですが、この完訳は、非常に参考になります。1948年頃、「UFO地球外仮説」の高まりをみせ、キーホーの記事で拍車がかかった時代、民間パイロットによるUFO遭遇観察証言は、「地球外知性の発見者」として人類科学史上の一大発見として表彰に値するものだったが、「流星」で処理され、「疲れていたのだろう」と評され、散々な目にあったのが、こうしたUFO目撃パイロット達でした。今でも似たりよったりである事は、万民の知るところですが、

ルッペルトとは、あるUFO目撃パイロットと知り合い、喫茶店でそうした仲間と会うことになりました。「我々UFO目撃者はどんな目に遭わされてきたか」をルッペルトは知り、彼らからの拳を浴びて倒れつつ、それに耐えます。

事実遭遇した者のたどる道は、これしかない、という基本的な自覚に立って、「それでも円盤は飛ぶ」と、あえて行動を起こす勇氣、これが重要です。

■アブダクション考

私の考えが変だったら、指摘してください。世界中にはアブダクション体験者がたくさんいます。またそれを研究する故マック教授のような学者もいます。彼らは出来事が精神病理に属するか、客観的な拉致事件かを判断する義務がある筈です。「白い体験」を聞く、ということや、カウンセリングという込み相談をするより、被害者が物理的に拉致されて、戻されるのか、本人の意識がそういう体験をしているのか、これは重要なことです。UFO現象は「客観的」であり、旅客機が遭遇したり、目撃者が写真や映像を撮ったりします。これは精神的な出来事ではなく、客観的に起こっている、つまり誰の目にも、あるいはレーダーなどの機器においても、認められる現象です。

アブダクション体験者が「吸い上げられる」とき、肉体が空中を移動し、追跡不能の場所に行くのかどうか、これを真面目に考えたとき、渡り鳥や動物に「くくりつけて」「背負わせて」移動を追跡する「発信機」という機械の応用を、思いつくのが自然の考えではないでしょうか。

私はこの渡り鳥や動物を追跡する装置について、詳しくは知りませんが、「電波を発する機器」を持ち、その発信源を探知する装置を、アブダクション被害者に持って(背負って?)もらい、彼らが本当に「拉致されたと言う」現場から、「空中へ移動しているかどうか」を調べられないものか、と思うのです。

そんなことは不可能、というのなら仕方ありません。しかし、可能なら、誰かが試しているはず。「本人が空中ケイキョされている時間、本人の肉体は地上の定点からまったく移動しなかった」ということが証明されれば、すべてのアブダクションケースにも適用されるべきと考えるのですが、何か私の考え方がおかしいのでしょうか。

あるいは、空中拉致被害者にカメラビデオを携帯させ、空中から拉致された状況を証拠として撮影できないのでしょうか。少なくとも、円盤乗船者は、「接近してく

る宇宙船」の写真を撮ったりしています。本物とかニセモノとかの問題は別にして。

そのような取組み方がなされないならば、アブダクション研究者自身が「おかしい」ということにはなりません。つまり、調査の方法とか調べる姿勢という部分で、別な動機が働いているということにはなりません。私が変だったら指摘してください。「天宮さん、それはまだマンガの世界の話なのです」とか。

■UFOの持つ軍事的脅威

人類が、どんなに努力して兵器を発達させても、到底太刀打ちできない相手が空にあり、常時監視の眼を光らせている、ということです。軍備を整える者にとってUFOが最大の敵であること、UFOがその気になれば、兵器を無能にするかも知れないという恐怖、そこに核使用を含む軍事的準備状況におけるUFO出現の意味があると言えるでしょう。

■劇映画の中のUFO

映画の画面に故意か偶然か映っていたものです。

最初に見たのは1968年8月18日、母親と一緒に観たロシアの超大作『戦争と平和』におけるボロジノ会戦(1812年8月)の場面でした。戦闘場面の後、青空の中に美しい3個の大小の円い光体が静止していました。ゴーストではない証拠に、最初、雲の切れ端の如くポツカリと見え、地上から立ち上るモクモクとした煙が光体を蔽うと、煙の向こう側からハッキリと輝いていました。仰角の一番低い位置の光体が一番大きく、斜め右上に等間隔で並び、それぞれ月の2分の1、4分の1、金星大、と当時のメモにあります。

次は中世スペインの英雄を描いた1962年公開の『エル・シド』です。王の怒りに触れ、国外追放となったロドリゴが荒野で水を求める乞食に出会います。彼は気の毒に思い、水を上げます。乞食は「いつも貴方と共にいる」という謎の言葉を残して去り、その乞食を見送るアップになったロドリゴ(チャールズ・ハースト)の顔のそばに青空の中の光点が見え、それは細かく上下に震動しているように見えます。ほんの一瞬です。カメラは安定していますから、カメラブレではありません。すぐ場面が変わるので、何度か見ないと見つけられないかも知れません。昔、エル・シドの伝承を研究した仲間(故人)が「エル・シドの伝承の中に光物が登場する」と商業新聞のUFO記事の中で書いていました。この映画の制作者は、神の如く英雄を守護する存在は外見が乞食のように見える、という主張を込めていたのでしょうか。その主張に呼応してUFOが画面に出演したと、私は考えているのですが、さらびやかな衣装をまとう優美な存在は、人類を滅ぼすサタンの使いと言われる話もあります。

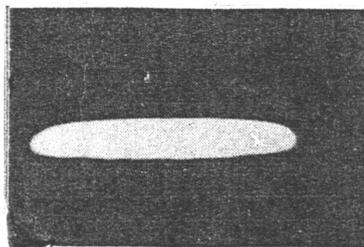


■ドライ・ラマはUFOを見たか?

以下は角川書店『ドライ・ラマ、イエスを語る』149ページからの引用です。

「……虹がなぜできるのかには、湿度と温度がある条件の時、などといった科学的な説明があります。そうそう、色を持たない、ただの白い光のような、そして弧を描かずにまっすぐな線になっているようなタイプの変った虹もありますね。あれは、なぜ、あんな風になるのでしょうか？ ずっと知りたいと思っているんですが(笑い)チベット仏教では、虹のイメージは二つのものを表わします。……」

もしドライ・ラマさんのお知り合いの方がおられたら、この写真のような物体を見た可能性もあります、とお伝え下さい。このあとに表示します。重たいので軽くしてから。



Taken by Mr. Matsumura.



■中国UFO古図の説明文

出典:張開基著『古中国正史中のUFO事件』

翻訳:古谷徳郎

「1890年～1892年の間のある年の9月28日夜8時過ぎ、南京市の南端の空に火の球が出現した。西から東へ進んだ。この火の球は巨大な卵のようであり、赤かったが、あまり明るくなかった。空中に浮かんでおり、速度は遅かった。その時は、空一面に雲があり、空は薄暗かったので、見上げると赤い炎が特別はっきり見えた。朱雀橋上でこれを見ていた人は何百人にもものぼった。30～40分くらいしてから、遠くへ飛んでいき、消えた。一部の人は流星だと思ったが、一般の流星の速度はとても速く、瞬間で消えてしまう。この火の球の速度は非常に遅く、ましてや空でとまっていた。だから流星ではない。別の人は、子供が遊ぶ時に放つ天灯だと思った。しかし、その時、風は北に向かって吹いていた。この火球は東へ進んだ。つまり、天灯ではない。このような所説入り乱れた状況により、誰が正しくて誰が間違っているか、わからなくなった。ただ、その中の一人の老人が言うには、この火の球が出現した時、わずかに音を出していたということだ。」



■年末の6連発

1部残部あり駒さんとこに見本として送りましょうか？

■いまは新たな戦国時代です

下克上という言葉は、400年前と現代とはやや内容が違

います。巨大資本は力であり、情報発信力、人民洗脳力、人民操作力、いずれも「力」です。捏造した情報(報道記事から科学的論文そしてアニメ・映画・漫画・ゲームを含む)により、自分の価値観をいかに広めるか、またそれによって多くの富を得るか、これは新たな人類の精神基盤上の領土獲得合戦です。時代の変化と、その中の「真実」は、棚ボタ式に、待っていれば来る、というのではなく、自ら血を流して獲得しなければなりません。

さて、高知城城下町で空に侍の首型ドバルーンが上がっていました。黒い塗料が塗られていた部分の反射の具合を確認するために、撮影しました。同僚が「何撮ってるんですか」と聞いたので「IFOです」と答えました。「IFOって何ですか?」と聞かれたので「確認物体のことで」と御答えしました。

■天宮清のUFO目撃の集計

「UFO目撃」とは、この場合、肉眼で見て記録(撮影も含め)を取ったものに限定。人物や風景を撮った写真に写り込んでいたとか、ビデオに映りこんでいたというものは除外。また目撃しても記録のないもの、仲間と共に観測会などの行事の場で大勢に混じり一度に多数見たものは含まれない。

- 1960年 7
- 1961年 19
- 1962年 10
- 1963年 12
- 1964年 2
- 1965年 3(スチル写真1回)
- 1966年 4
- 1967年 5
- 1968年 2
- 1969年 1
- 1970年 3
- 1971年 2
- 1972年 0
- 1973年 0
- 1974年 1

-----天理市に移住(東京在住時合計71回)

- 1975年 7
- 1976年 3
- 1979年 9
- 1980年 9
- 1981年 4
- 1982年 7
- 1983年 2
- 1984年 2
- 1985年 2
- 1986年 4
- 1987年 3
- 1988年 4
- 1989年 13
- 1990年 0
- 1991年 5(うちビデオ撮影3回)

1992年 0
 1993年 2(この年の前後頃、妻子による目撃・撮影が多く、
 私自身の目撃は少ない)
 1994年 2(うちビデオ撮影2回 スチルカメラ撮影1回)
 1995年 0
 1996年 1
 1997年 4(スチルカメラ撮影1回 室内目撃1回)
 1998年 1(スチルカメラ撮影1回)
 1999年 0
 2000年 2
 2001年 1
 2002年 1(ビデオ撮影1回)
 2003年 2(ビデオ撮影1回)
 2004年 3(ビデオ撮影2回 室内1回)
 2005年 3(ビデオ撮影1回)
 2006年 1 天理在住時合計97回

46年間の合計 168回÷46年は一年平均で3.6回となる。
 タイプ別、時刻別など課題はあるも、現時点ではここまで
 とした。

昔(1961から1963年頃)は、子供達を集めて観測をする
 と、必ずといっていいほど何か異常な光体(棒状の光体で
 ゆっくり動く)が現れた。それらはここには含めてない。
 天理においては、目の前や家の前、室内など至近距離に
 小さな飛行物体を目撃することが多くなった。それらは壁
 に向かったり、天井に向かったが、何の痕跡もない。大きさは
 ピンポン玉から半透明のシャボン玉まで。また海面を移動
 する発光体から発光する粒子状のものが多数発射され、
 ビデオに撮られたこともある。それらは超小型UFOといっ
 た具合だろうか。UFOの謎はつきない。

■どうぞ、どうぞ・・・

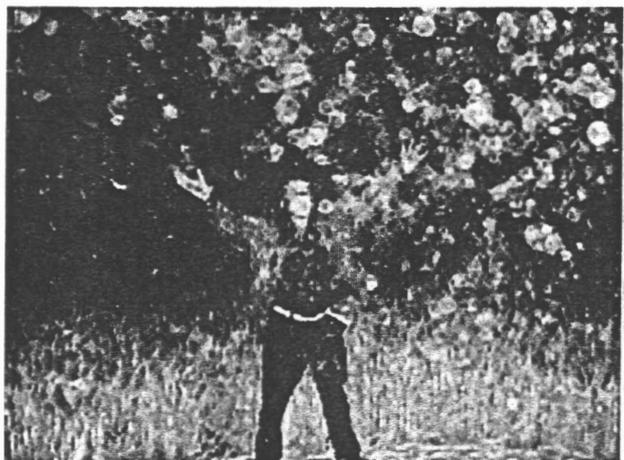
私たち(?)は、空に不思議な物が見えた、天から高貴
 な人が来た、という体験と伝説と遺跡に価値を見出す変人
 ですが、全世界が同じ認識に到達した暁には、変人では
 なく、常識人へと変貌を遂げます。そのためには「宣伝」が
 第一です。個人が秘蔵していても、個人が死滅すれば秘
 蔵品は役目を果たすことなく、地に埋もれます。不特定多
 数の人に、「とりあえず報告しておく」これが私の義務です。
 明日、その資料が焼失しても、電子空間に保存された画
 像は、いつかは役に立つこともあるかも知れません。また、
 大量部数の市販本ならば、その本とページを報告すること
 で、誰でも原資料(この場合出版物を指す)を入手できます。

ところで、11月25日夕刻に観測し、夕闇迫る空を行く飛
 行機を連続撮影した写真を点検していたところ、ブーメ
 ラン型の光体的なものが写りこんでいるのを、社内旅行に出
 発する直前のバスの中で見つけました。最初「何撮ったの
 だろう?」と思いましたが、片隅に小さく飛行機の影が写っ
 ていたので、目標は飛行機の連続の最後のコマであること
 を確認しました。近く、ここに報告できると思います。
 また、山内一豊の家紋は、2000年に英国を訪れた時、エ
 プバリーの丘から望見し、現場に赴いた「プロペラサー
 クル」と同じ形でした。一応、次に掲げるのはやはり「一億人
 の昭和史」4の175ページ「ウルグアイ沖で自爆する独戦
 艦グラーフ・シュペー号」。



■これは何か?

本日イスラエルから届いた2冊のUFO誌の一つ「2000
 plus」の衝撃的な写真の一つです。ミステリーサークル上
 空に波状の光跡が写るもの、オーブとよばれる丸い発光
 虫?が写るもの、さまざまある中の一つです。
 こんな解釈はどうでしょう。発光する液体に石鹼を混ぜて、
 シャボン玉の液を用意します。それをミステリーサークルの
 現場で次々とシャボン玉にして空中に浮かせます。すぐには
 地面に落ちないよう、地面から人工的な上昇気流をつく
 ってやって、なるべく多くのシャボン玉が浮遊する状態を作
 り、撮影します。すると、こんな写真になるかも知れません。



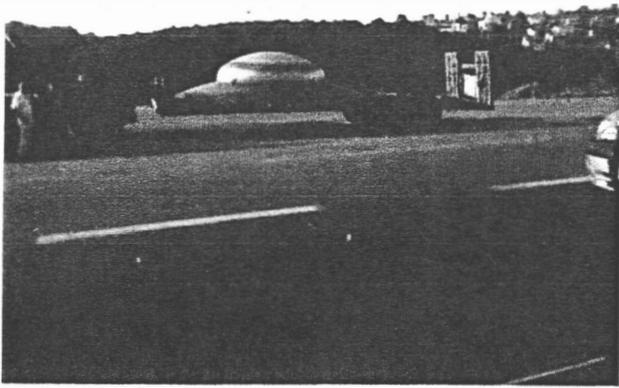
■トレーラーの上の円盤模型?

ブラジルのA. J. Gevaerd氏から届いた写真の一枚で
 す。奇妙な円盤の輸送を見る人々、というもの。

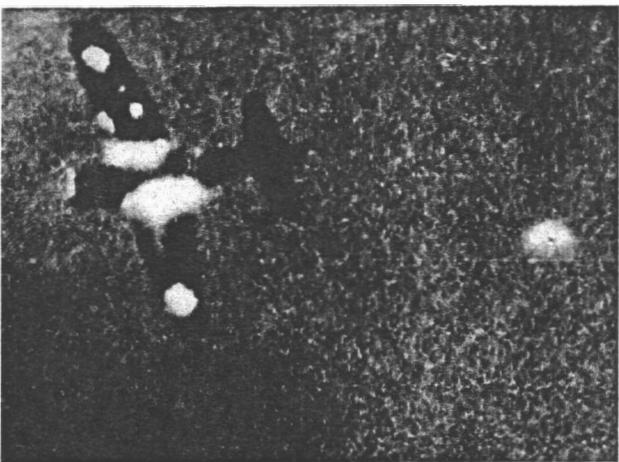
■トレーラーの上の円盤模型?の2

報告によりますと、トレーラーは重量物を載せているよう
 に、非常にゆっくりと進んで、後続車の渋滞を招いたようで
 す。また驚異的な物体であるのに、シートで覆うことなく、
 露出しているのが奇妙だとも。

本当に重量物か、重量物に見せかけて速度を落として
 いるのか、写真だけでは分かりません。車輪近くにある板
 状のスプリングが水平とかたわんでいる確認がとれば、
 確かにそうだと分かるのですが。また、全部露出させてい
 る、というのは見せるため、話題やその趣味のニュースに
 する目的と思われます。もっと巧妙に、シートで一応覆って
 、何かの弾みでシートがめくられて本体が露出し、係員があ
 わててそれを元に戻す、とか、見た人に口封じの現金を

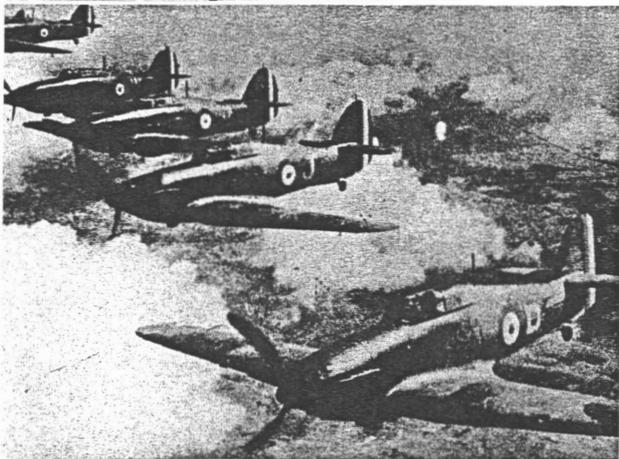


渡すといった演出があれば、さらに「神秘度」は増すと思われる。そこまで知恵が回らなかったようです。しかし、トレーラーのレンタル料金、模型製作費と、かなり金がかかりますから、単なる趣味のおふざけというより、大きな資本を背景にした、それなりの機関による仕業としたほうが自然です。



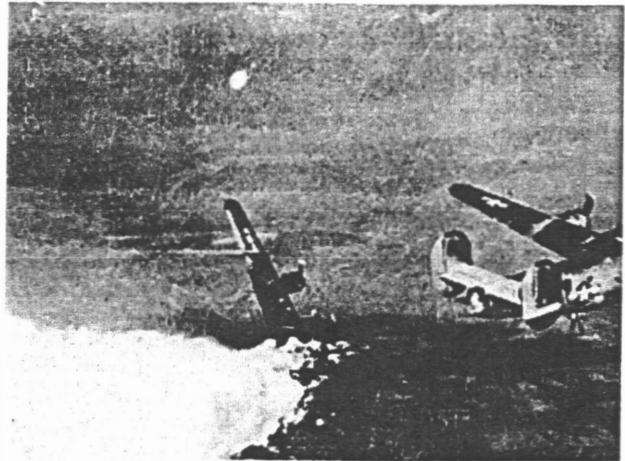
■古い写真

「レイテ沖で、グラマンF6Fに迎撃された、日本の特攻機(1944年11月)」という説明です。右側の単独の雲状が何かな?というわけです。確かベトナム戦争のときも、「ミグだ」と説明されていたのに、全体が白色の雲状物体という写真もありました。



■今度は空

第二次世界大戦時の英国主力戦闘機ホーカーハリケーン戦闘機編隊と、雲間の縦楕円雲。「一億人の昭和史」より



■今度はこれ

四国高知から戻りました。坂本竜馬、山内一豊など歴史上の人物ゆかりの地ということで、少し勉強になりました。丁度大河ドラマも高知城という最後の場面となったようで。さて、また古いグラビア印刷の写真からです。説明では、ドイツ、ブルッフハンマー上空で撃墜されるB-24となっています。そのそばに円い光のようなものがみえます。

■オーブ考

ORBSと呼ばれる現象がある。ORBSは野外、室内を撮影したとき、撮影される。

それらは白色、或いは半透明の円形で、その多くは同心円状の構造を持つようだ。

私は偶然、この現象を撮影した。

2006年12月12日(火)午後8時頃、私は近くのマーケットの照明が空に反射しているのを見た。その夜、空は雲に覆われていた。そして、霧が低い高さで辺りを包んでいた。

私はデジタル・カメラ(RICOH Caplio G4)でマーケットの照明を撮影した。

ストロボを作動させて2枚、ストロボ無しで1枚撮影した。ストロボを発光させて撮影した写真には、一面に円い斑点が現われていた。その円い斑点は、ORBSに似ていた。

私はStudio Kissyo-himeが運営する画像掲示板「AMANO-UKIFUNE」に写真を投稿した。この掲示板は、千葉県、秋田県、東京、奈良県のUFO研究家が情報交換している。

私は日本のUFO研究家4人(Kitisyo-Hime, Teizi Sato, Masaya Komagamine, Taira Fuji)が投稿する掲示板「AMANO-

UKIFUNE」に写真を掲載した。

KOMAGAMINE氏は、早速実験した。彼もORBSを撮影した。彼は室内で加湿器の蒸気の近くで写真を撮った。また、以前撮影した舞台ステージの写真を紹介した。その写真には白く円い大きなORBが見られる。

我々はORBSについて、仮説を立てた。「空気中の水蒸気と埃がORBSの材料になる」

それらはカメラのレンズの近くにある。それらは肉眼で見えるほど大きくない。恐らく、その大きさは1mm以下であろう。

カメラは遠方の人物や風景に焦点が合っている。カメラのレンズの前にある塵の群れは、白いストロボ光を受けて、ピンボケ像を作る。それらは、円形の半透明の光の群れとなる。

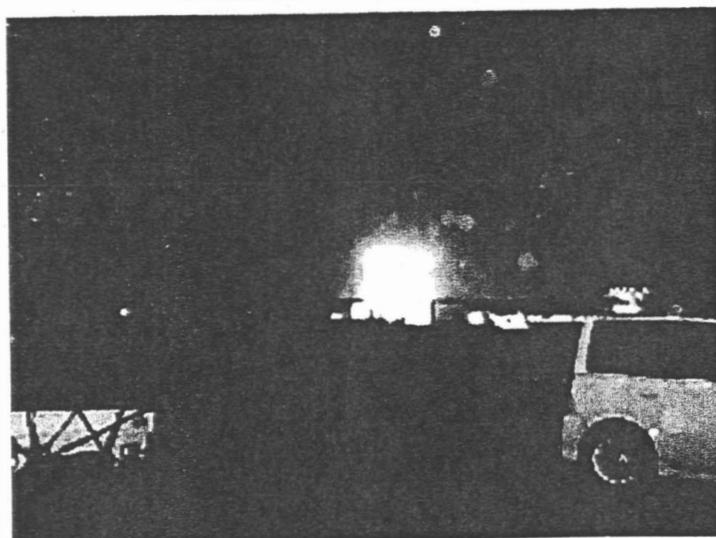
私は寝室の毛布を整えた。その時、毛布を少し振った。私はすぐに寝室を撮影した。やはり、多くのORBSが写った。レンズの近くにある小さな埃が、ストロボの光を受けたのである。その中の一つは2個の球体が接近し、それを半透明の幕が覆って

いた。

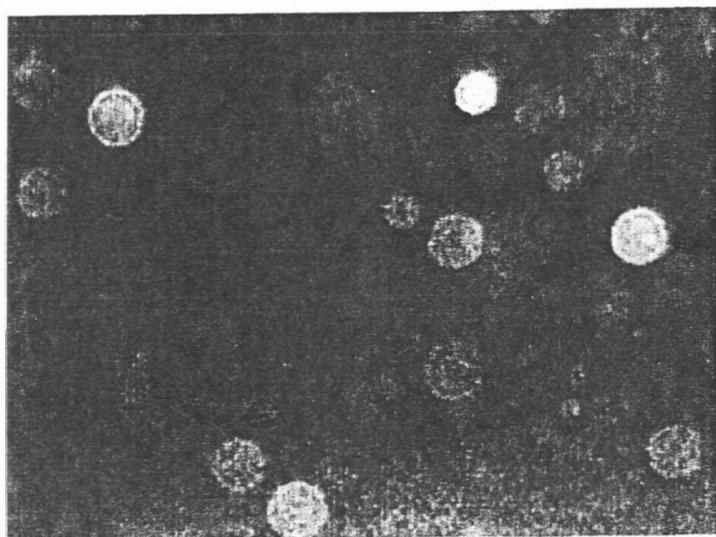
私のアイデアは、ORBS現象を説明する全てではない。まだ未知の現象が存在する。例えば、ORBの表面に人間の顔が見える、ストロボの光を発光しないでも写る、つまり自ら発光する、という様な場合である。



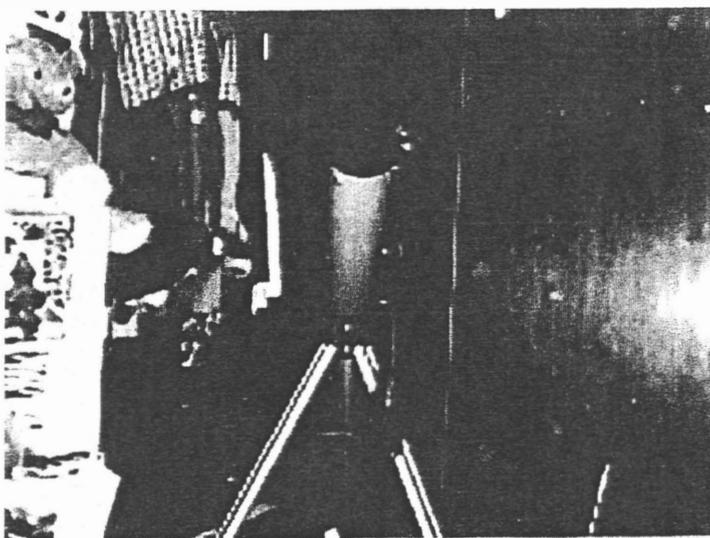
■ストロボ無しの写真。照明のみで、斑点は写らない。



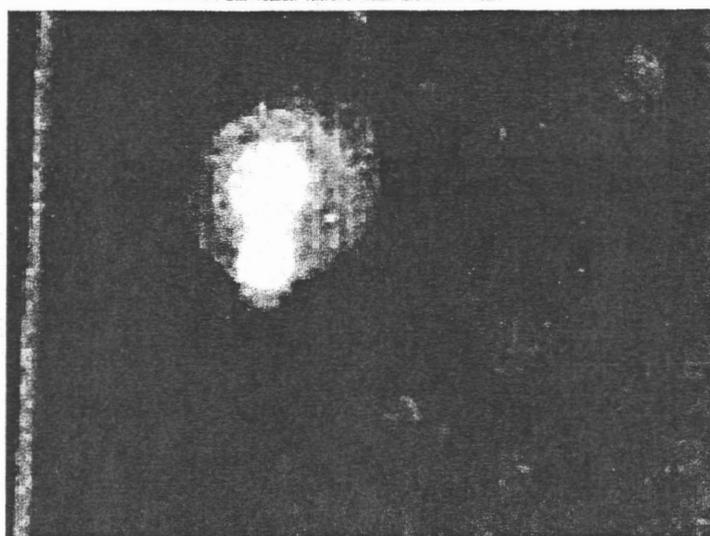
■ストロボを発光させて撮影した写真。円い斑点が現われる。



■斑点を拡大したもの。同心円の構造をもっている。これは水蒸気の粒。

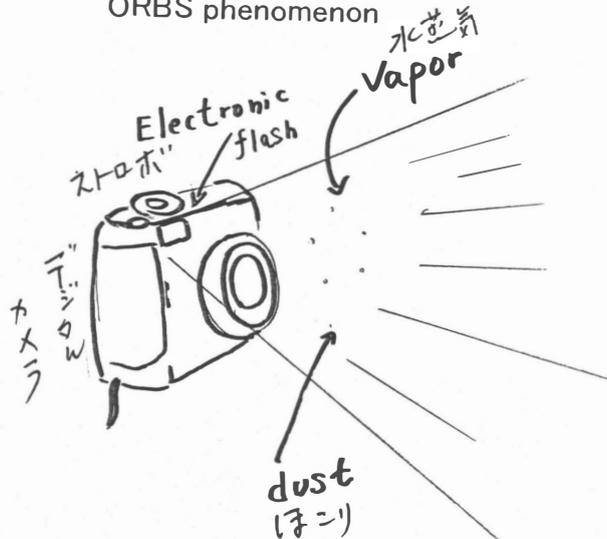


■室内でも布を振った直後に撮影。円い斑点が散らばっている。

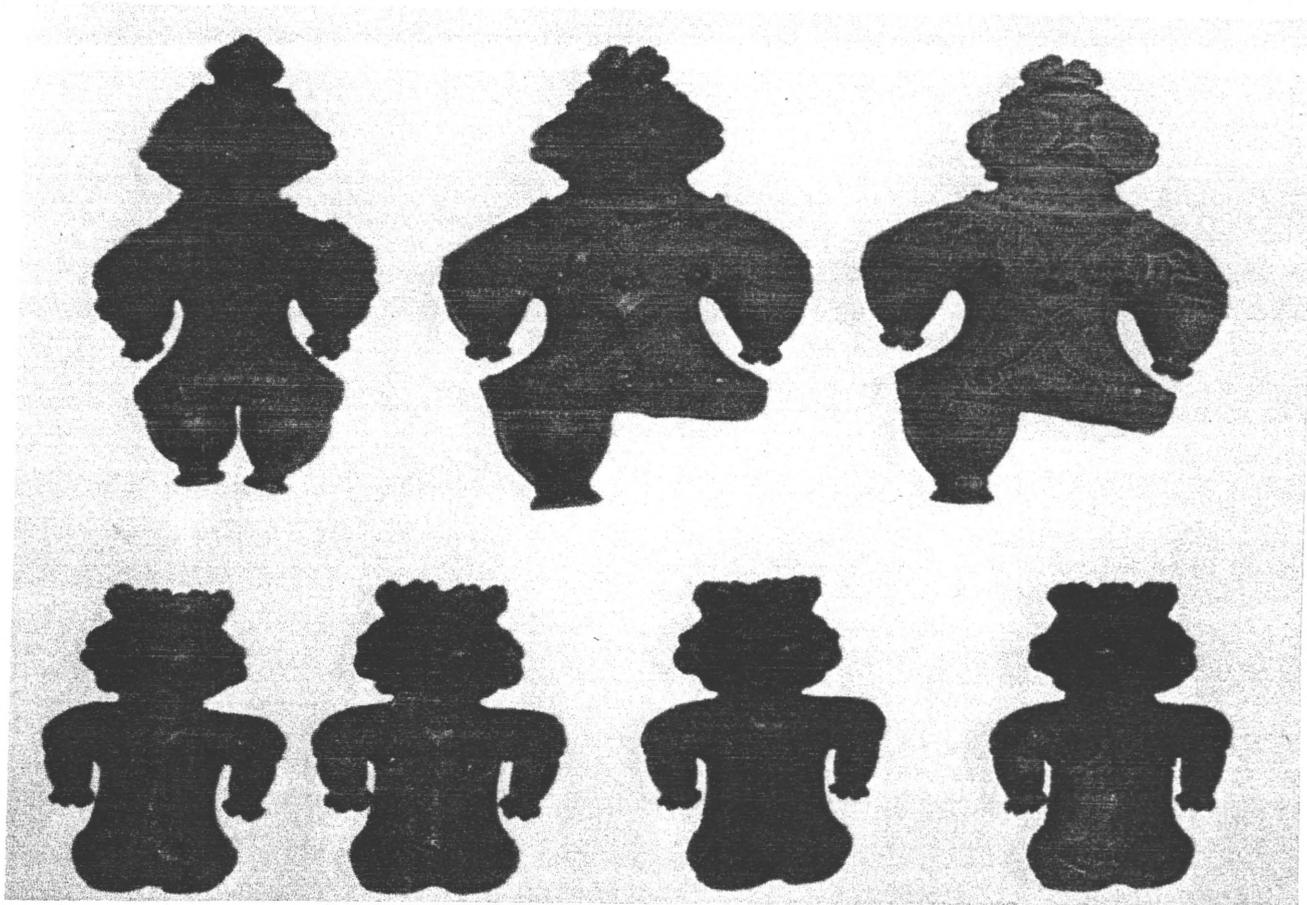


■斑点の一つを拡大したもの。埃がストロボ光を受けて神秘的な構造で写っている。

デジタルカメラORBS現象の解明図
Clarification chart of digital camera
ORBS phenomenon



Kiyoshi Amaya
2006.12.



■2006年12月16日に五所川原市の土偶製作者柴谷浩二氏より編者に贈られた遮光器土偶レプリカ。小さいが非常に精巧な造り。編者は近くこれらをポーランド、イスラエル、ブラジルに送る予定。



■ポーランドのUFO研究者ロベルタ・コンスタンチン・リシャニキエビッチ氏から寄贈された最新刊。彼はミロス・イエセンスキー博士(1967年生まれ)との共著で、この書を出版した。

リシャニキエビッチ氏とイエセンスキー博士は、既に『WUNDERLAND』という第三帝国の技術やヒトラーに関する著書を共同で発表しており、共同研究者として活動しているようだ。写真は、向かって左がリシャニキエビッチ氏で、その隣がイエセンスキー博士。この書は、太古の洞窟に残る高度な技術文明の痕跡について探求した様である。